

同人雜誌

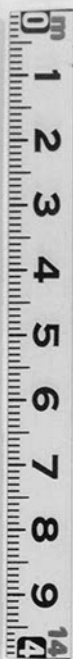
港

の

灯

月刊

三月號



***** 同人雜誌 *****

港の灯

刊 號
三 月

文藝に娛樂に

郷土の言論機關に

發刊の回顧と投稿の修正	並びに誤植に就いて	本誌主幹	東 義 將 (三)
早 春 譚	瀧 端 滋 子 (七)		
現代詩の在り方と郷土詩壇の展望 (一)	砂 押 與 一 (八)		
小説報 恩 狐	鹿 野 卓 二 郎 (五)		
折々に..... 木田野菊 (七) スケターワルツ	相澤 正 一 (二)		
裏 切 り ぬ	T		生 (三)
來 春 感 想	二木松田 中 八 十 翁 (三)		
世事三代目考	東 義 將 (三)		
長篇小説 吹雪を衝く (三)	東 義 將 (三)		
表紙 執筆	鈴木 三 男		
特別會員、贊助金謹告			
新會員紹介			
映畫「黒雲街道」を観る	黎 明 (美)		

目 次

昭和二十四年三月號

旅行者指定食堂

惠比須屋食堂

柏 浦 角 治

小名濱町船引場四三

(小名濱驛前)

有限 宮 下 商 會

小名濱町字愛宕下(第二小學校前)
電話四五九番 (タイヤ一部)

石城郡小名濱町下町
電話一九八番(自轉車部)

黒 澤 病 院

黒 澤 廣

福島縣小名濱町本町一八
電話(小名濱)四五番

此度タイヤ一部を左記の場所に移轉致しました
相變らず御引立の程御願ひ致します

發刊の回顧と投稿の修正並びに誤植に就いて

本誌主幹 東 義 將

「港の灯」も第三號を發行する事が出来た。但し本誌の繼續及發展の難事は益々今後に残されるわけでは有るが、此の際、本誌の發足以來の事を會員諸氏に回顧して戴き、再檢討願ふ事も意義有る事と考へる。發足に當り本誌の表紙に就いては、初めは繪にするつもりで、同志でいろ／＼と案も持ち寄つたが、過日映画館で映寫された「郷土の雜誌港の灯」の宣傳を見られた方も有るうが、あの圖柄が、即ち幹事小野雄氏の案で有つたのだ。尤もあれは、製作する所の都合で、文字の配列の關係が、肝心の燈台が右に成つてしまつてゐる。その様に繪にするつもりで有つたのが、印刷所へ計つた處、經濟的にとんでもない話なので、止むなく表紙も字ばかりと云ふ事に成つてしまつた。併し筆者も是にはがっかりしたが、併し例へ字ばかりでも何かしらそこに一ツの意味を持たせ、それに伴つた美しさも出そうと苦心して、自分の頭の中に描いたのが現在の表紙の形態で有る。即ち港を青く灯は赤く、無論外の二重櫓もそれを表はしたつもりで有つた。何しろ色は、赤と青の二色きり用ひないのが印刷所との約束で有つたので、是以上の構想も浮び様が無かつた。併しその二色が巧く港と灯にぶつかつて呉れた事は幸だつた。勿論、是には會員鈴木三男氏の美事な筆に負ふ處が多い。只筆者は書くに云ふ以外に發足第一歩で、この苦勞が有るうとは豫期しなかつたもので有る。

誌名の「港の灯」は、筆者は是を創案して是なるかな、の感を抱いたが、同志に計りその共鳴は受けてゐる。併し「港の灯」が當小名濱ばかりか平方面、内郷町方面でも「穿ち得た誌名」として好評で有る事は喜びで有る。又識者の中には、此の「港の灯」を、小名濱港に拘はらずに、港とは文化の注入する所、即ち日本の文化も幕末の浦

賀其の他數港の開港に寄つて、もたらせられた事とを結び付けて、港と文化を直結させて解釋を下した人も有る。感謝する處の御意見で有る。

内容に就いては、既刊二ヶ月が御存知の如く同人雜誌の形態を爲さず、さながら、個人雜誌の如き感を呈してしまつたのにも關はらず、今日第三號發行を爲すを得た事は筆者の深く會員諸氏に感謝を申上る處で有る。實は筆者は、創刊號を出した後に識者二三の人の意見を質して見た。處がその答へが「あんた一人で殆どを書いてゐる様だが、それ故に不評ならば兎も角、大抵好評で有るのだから、續けて、がんばつてみなさい。そのうちには、ついて来る人も有り、又立上つて呉れる人も有るうから」との一致した御意見を戴いた。筆者はそれに感激して、尙努力は續けたが、幸にして上記識者の言は、今日確かにその曙光を見る事が出来たので有る。即ち當三月號を手にした諸氏には、それは肯づけて戴ける事と確信する。

併し、中には妙な事で反感を持たれた点も有つた。即ち筆者が投稿に對し手を加へ是を修正すると云ふ事で有る尤も、そんな人は幾人も居ない。例を挙げると創刊號の小野正雄氏の作品は短歌も俳句も筆者が手を加へた事は事實で、しかるが故に同氏の反感を受け、その脱會も受けた。併し誰が見ても、をかしい所はをかしいのではなからうか。あるいは小野正雄氏は筆者を門外漢扱いにされるかも知れないが、併し筆者は決して同君が考へる様なそれ程の者ではない。失禮乍らその点御安心を願ふもので有る。又訂正したにしろ、決して筆者が一人で勝手にやつたわけではなく、本人のもとにその作品を持参し、同君に相談してやつた事で、勿論その共鳴と承諾を受けてゐたので有る。尙且、短歌としては權威の平市瀧端滋子氏に批評を乞ひ、直した方をもつて良しとの答へを戴いてゐるのだ。此の様に筆者ばかりでなく、短歌の先輩が直した處を以つて良しとし、しかも小野政雄氏自身が承諾されたので有り乍ら、それを不服とし、反感を持たれた事は筆者の常識では一寸解釋が付き兼ねる。上記の言は敢て小野正雄氏に語るものではなく、凡て若い諸君に今後本誌に投稿を希ふ上に於て、よく聞いて戴き度い事なので有る又、同人雜誌に經驗深しとして、同人雜誌と云ふものは、投稿作品を何かまはすにその儘、載せるのが本當だと説く

人が有るそうであるが、そうした人はあるいは同人雑誌と小學校の回覽とでも混同した解釋を下してゐるのでは有るまいか。元來同人雑誌、即ち會員の投稿に寄る雑誌には二ツの行き方が有るのだ。その一ツは同人が主に書き、會員の投稿は是を嚴選して、掲載か、没書かの二ツの決定をなすものである。他の一ツは、投稿を相互に批評し合つて、少しでも良いものとして發表するものである。無論是にも優良作品はその儘掲載するのは當然で有り、前者は余程程度も高く、その會が隆盛で、且同人もがつちりとしてゐて、中にはベジで飯を食ふ位の人間が二人や三人はゐなくては不可能な事なので有る。尤もベジで飯を食ふからと云つて、必ずしも我々に勝つたものばかりとは限らない。敢て高言ではない實相で有る。大体に喜ばれ、又文筆を愛するものに歡迎されるのは當然前者の行き方であるが、本誌がその方法を探れない事は切に御諒察願ひ度い處で有る。併し筆者が主幹として採り入れてゐる方法は別に後者にのみ拘はつてゐるわけでもない。良い作品に對しては、かりにそうした人達の文の中に讀むに苦む様な文字が有つた様な場合にすら、勝手な解釋を下し、又は判讀をなす等の事をなさず、一々參上して御本人に質すの態度を取つてゐる。

それは誰しも自分の作品、自分の文章には自認(うぬづれ)は持ち勝ちで、自分の投稿が一字一句の修正もなしに活字になれば、こんな愉快の事は無いので有る。又元來、投稿はそれが本當で有るのだ。併しうぬづれは凡てのものゝ行き止りで、本人以外の者が見てをかしいものは誰が見てもをかしいのが常識で有ろう。學術上の發表の見解の相違なぞとは話が異ふ。中にはかなりしつかりした物を書く人でも、筆者に對して「悪い所は御遠慮なく」との謙讓の言葉の有る人も有る。正直の處そんな人は十人に一人だ。大ていの人は殆どが自己の文筆に、作品に、うぬづれと云ふより自信を持ち過ぎてゐる。本誌への投稿に限らず、随分書いてゐる人でも、何かでその人の書いたものを讀んで、をかしい處を見出すと筆者は實に慄然とするので有る。別にその人に對して慄然とするわけは無く、筆者自身に對して不安を持つので有る。如何となれば、筆者は誰の言葉でもその批評は尊重し、肯づけた所は必ず訂正する事にしてゐる。處が現在の筆者には眞向から筆者の文を批評して呉れる人がゐないので有る。僅かに同人新妻氏か鹿野氏の來訪の砌、又は機會有る毎に本誌關係の人に目を通して貰ふ位のもので有るが、それにしても

殆ど新妻氏以外には積極的な批評も無く、止むなく自身で再讀又再讀、修正、又修正して、しかして發表するのが正直の處筆者の文章なので有る。即ち筆者は自分では先づ是で良しとして、自己の作品を發表するものである。處が何かの紙面で他の人の文章の妙な所を見出すと、即ち自己の文章を省みて、しかるが故に慄然とするので有る。筆者のものなぞは、確かにをかしい處も多いので有ろうが、殘念乍ら自分では氣が付かないので有る。批評をしてくれ、又教へて呉れる人が有る者は實に幸で有る。筆者自身も他人の、批評訂正を希つてゐる事は前述の通りで此の様に文筆と云ふものは、決して公表するもので有るならば尙更——批評をして呉れる人が有る限り——その批評を受けて、少しでも互に立派に近いものとして發表するのが本當で有ろうと思ふ。又それでこそ、そこに面白味も有り、而して勉強にも成り、進歩も生むものに相違ないので有る。本誌は平市から東京、横濱、あるいは桐生、足利等の遠隔の地に送行くので有る。郷土のうぬづれ作品を相互の檢討もなく、その儘掲載して只活字と雑誌にして満足してゐる位なら「港の灯」など發行しないにしくはないので有る。

又、筆者が前號に於て「若い諸君が文筆に親しまれる事は、諸君の人生の面白を一新する事で有り、切に味はつて戴き度い事で有る」と申上げてゐるのは、始めから何も素晴らしいものを書いて貰うなぞとの考へではない。只郷土から「港の灯」に親しんだが故に文筆を愛し、又少しでも文筆の向上を見た人が例へ三人でも五人でも生れてくれたとしたならば、それを以つて筆者が、同志と共に「港の灯」を發刊した使命の半は達せられたと云ふもので有る。重ねて云ふが、互にうぬづれ文は禁物で有る。筆者の如く、自分が書いたものを再讀、又再讀して、妙な所、誤れる所を訂正する事も完全では無いが、是も一ツの方法で有る様だ。徳富蘇峰氏の如きですら、新聞社の論文の寄稿に、修正に修正を重ねて、その原稿は實に讀むに堪へ難く、中には一枚の原稿紙に僅に十二三字より書かれてゐないのが有つたそうである。併し中には日素菊地薫氏、及臨港田口勝男氏の如く、自己の作品に對し、筆者と共に再檢討し、且筆者の説を入れて、修正清書送して呉れたのにも關はらず、是を本誌に掲載しなかつたものゝ有つた事は、誠に申譯けなく、只是に就いては一寸事情が有り、菊地氏にも、又田口氏にも過日社外に於てお目に掛かゝる機會を得たので、事情を説明してお詫びは申上げて置いた。

併し、投稿を掲載した結果に筆者が「一番何と云つても濟まなく、且申譯けなく思ふのは誤植と脱字である。誰しも活字に成つた自己の文章、作品を見て、その中に誤植脱字を發見したならば、必ず不愉快の感情を持つて定つてゐるのである。確かに腹立ちさへも覺えるものである。大抵平活版所で印刷物の依頼者は、校正は必ず二人か三人でやつてゐる。一枚丈の新聞ですら三人位でやつてゐる所もある。實際此の程度のページを終始一人でやつてゐるのは「港の灯」の筆者一人丈である。何分、人が居ないから仕方が無いのだが、校正も一人より二人、二人より三人の方が誤植を食い止める事は確かである。錯覺と云ふものは實に恐ろしいもので、誤植をどうしても、その儘讀んでしまふ事があるのである。一流新聞や雑誌の中に、誤植を見ないのは校正の熟練もあろうが、多くの目を使ふ爲で有ろうとも考へる。併しそれにすら、時には誤植を見る事がある位だから、やはり人間のやる事で間違ひはあるのか。二月號裏表紙の安田善一博士を喜一と印刷されて、幾度見ても自分では善一と讀んでゐたのである。大きな措覺である。何しろ高名の安田博士の事であるし、あの誤植に就いては、會員諸氏の方から、指摘される場合の方が今以つて多い。特にしどいのは「ウラ、」御主人の大本信隆氏を大森と印刷した事で、木と森とどうして誤つたか、今以つて不愉快で仕方がない。何しろ、今度の平への校正通いは、筆者も三十八度、三十九度の高熱を押しての状態であつたので、自分の氣力が影響した事も事實であらう。前記、兩氏に就いては、此の文の中に深くお詫び申上げる。併し率直に云つて、特に申譯けなく思ふのは、本文の誤植で有る。新妻渡氏の文章の中の「心の金線に觸れる」を「全線に」と印刷したり、又宇佐美武久氏の文章の中にも特に大切の三ヶ所三字の誤植を見るが、實はあれは第三校正で完全に自分が改めたもので有つたが、印刷所の方で失くされて、第二校正の儘で刷られたもので有り、是は印刷所も認めてゐる事である。併し何と云つても筆者の責任で有り、新妻氏並びに宇佐美氏にお詫び申上げると同時に、筆者自身も實に残念に思つてゐる事を申し添へるもので有る。又筆者が印刷所の諸氏に誤植を助けられる事も實にしばしば有る。全く思い掛けない誤植、とても見別けるのに至難な誤植を實に美事に發見され、やはり熟練故だと感じる事も多いのだ。思ひ掛けない誤植を改めた時は實際胸がスーとする思ひをなすものである。當分校正も二人でやる時期は一寸考へられないが、筆者も熟練もしようし、尙一生懸命にやつて、極力誤植脱字を食ひ止めて、寄稿者並びに讀者に不愉快を與へない様に努力をする。

—(完)—

早春譜

瀧端滋子

夕まけて風立ち冷えし外の面には遊びつきざる子等の華やき
浅宵を遊びあかねば呼ぶ聲のとほをちにして夕餉告げをる
子等呼ばふ聲や絶えしか暮れ果て、上弦の月細く匂へる
けならべて春かと思ふ丹椿の葉にゆれこぼち反射る陽の光
丹椿のつやめきゆるゝ朝の間はほろけきを戀ふ静かさにおり
思ひわび人の戀ほしき春夕べ丹椿の位置は替へて水はる
陽の移り早きを云ひてものを縫ふ位置は日向を追ふて變へ行く
年ふりて消ぬべきなりぬ思ひ出の時に新たに戀ふ事のあり
我が選良とたのむ人なれかにかくに投票終へて風の街行く
選挙戦かくて終りぬ歸り來て又政策表をひろげ見入りぬ
にべもなくことはられつゝ廻り來て南天の實の朱きがかなし
生くる事の危しさ思ふそろそろと川の流れに沿ふて吹かれ來
愚かしく來し方戀ふる時しを木の葉さやがせ時雨渡り來(以上三首紙賣りの歌)

折々に

木田野菊

軒先に並ぶ氷柱や銀すだれ
遠山や緋模様に残る雪
寒月や星かけまばら肌寒し
日を受けて松の並木や空の冴え
氷上に花の緞子の模様かな
湯本所見
川面より湯氣立ちのぼる霜の朝

現代詩の在り方と郷土詩壇の展望【二】

砂 押 與 一

詩に關するエッセイを書こうと思ひつゝ、今日が日迄遂に實現の機がなかつたと言ふのは、先ず第一に私の貧しい詩歴と淺薄な教養を以て高度なレベルにある現代詩を論ずる事は吾身に不相應な計画であり惹いて世の人の嘲笑の的となることを恐れた事と、一方詩論と平行する作品の裏付があつて始めてそれは可能なことであり、研究過程にある私は其の点に於て一つのデレンマを逃る可くもないことを自認せざるを得なかつた事に由來する。然し乍ら最近に至り少しく考へる所あり、標題に關し思ひの一端を草してみたいと思ひ立ち、「港の灯」誌上に筆を取ることにした。即ち研究途上にあるが故に其の指標を鮮明に確立し、それを自ら反趨することに依つて、私の今後の詩作にプラスできると考へられるし、又巷間しばしば聞かされる筆者の詩はわからないと云ふ言葉に答へたい爲でもある。

わからない詩が無理なのか、詩がわからないのが無理なの

か。其の点を究明することは私の當然果さねばならない役割である様に考へられるからである。それと尙此の問題と緊密なる關係にある郷土詩壇の模様に就ても少しばかり觸れてみたいと考へるものである。茲に言ふ郷土とはごく狭い意味での、主として小名濱を指すものであることを豫め御諒承ありたい。元より淺學非才標題に關して満足なる説明は出來得べくもないが、郷土文藝誌の發展の一助ともなり、且つそれが現代詩を理解する上に多少なりとも、ひ益するところがあれば私の最も光榮とするところである。尙茲に附言して置きたい事は、あく迄概略を示すことであつて、テキストではないといふことである。それは私の拙文に依つて、貴重な「港の灯」の頁を餘りにも割愛することは忍びないし、又本格的に勉強せんとする方には現代優秀詩人の著にかゝる「入門書」或は「現代詩の鑑賞」に依られることをお奨めしたいからである。

順序から言ふならば、當然詩の起源及詩の定義から始めねばならないのであるが、今の場合それには餘り觸れず、唯簡單に詩と云ふものは、新聞雑誌の上にみかけるそれを指すといふ程度に止める。之では甚だ漠然としてゐるので、現代形象詩のホープ村上成實氏の言葉を借りていふならば「詩とは誰もが感ずることを、一定の形式に隨つて、一番びつたりする言葉でまとまつた形にあらはしたものである」といふ事になる。こゝ言へば讀者は直ちに啄木、藤村、白萩、春月あたりが思ひ出されるであらう。それは尤もなことであり、詩としての要素を備へてゐると見做してよい。然し現代詩と呼ばれるものは、それから見えて遙かに高度な位置にあることを知つていただきたい。それは勿論其の發表された時代に於ては確かに現代詩と稱されたであらうが、時代は進展する。それらの作品群は今日では最早古典に入りつゝあるといふ事が出來ると思ふ。前記作者の詩に、現代詩としての性格（綜合と省略）意義を帯びてゐるものが絶無であると云ふのでは決してない。其の性格と意義が明確に認識され把握されなかつたといふ事で、高い價值をもつものが必ずあるであらうことを信じてゐる。明治時代の新体詩から、大正の自由詩を経て成長し、發展してきた現代詩と云ふものは、大正自由詩のそれと比較して、著しい飛躍と前進とを發見できる。詩の歴史の足跡を辿るなら、現代詩の置かれる位置が容易に理解されるであらうと思ふ。之を今例に依つて示すならば、

▲新体詩の例

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なすはこべは萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの釜の岡邊
日に溶けて淡雪流る

▲大正自由詩の例

今日も寂しく道を行く
見知らぬ人の中を行く
丁度異國の町を行くやうに
誰にも知られず、誰れをも知らず
賑やかな町のまんなかに
ひしひしと
世の寂しさにひたされる
私はこんなにも寂しい私だ

▲現代詩の例

塙の崩壊するあと
見捨てられた温室の扉のあと
嵐は夜どほし
私の庭をあらした

身ぢかに零の音がつづいて
雨は
皿のやうに浅い夜の中に溜つた

以上掲げた三篇の詩は、明治、大正、昭和を代表する作品であるといふ譯ではない。唯其の時代を背景にして生れたものであることに間違ひはない。即ち明治時代の新体詩に於ては、詩が詩である爲にはそこにリズムがなければならなかつた。リズムは詩を形成する最も重要な要素でなければならなかつた。之は新体詩の共通理念である。それが大正の自由詩に移ると、内在律に轉化し今日及んでゐる。現代詩に於てはリズムの問題はそれ程やかましく云はれないけれども、リズムは其の様な形に於て詩の底流となつてゐることは争へない。尙参考迄に言ふならば、フランス詩壇に於ては今尙絶体の力を持ち、一貫した生命を保つてゐるといふ事を、詩の文獻で讀んだ記憶がある。そして詩の用語は新体詩の文語体から、平易な口語体に移つたことも當然の成りゆきと言へよう。新体詩といふものは、現在の私達には只校歌、團歌のやうな形で親しむ以外は、それに接する機会も少いので餘り深入りする必要もあるまい。茲で注意しなくてはならないのは、大正の自由詩と、現代詩のあり方である。端的に言つて、大正自由詩の場合七五調或ひは五七調のそれと認識されるリズムは無いけれども、親しみ深く讀める所以のものは、矢張りリズム

たつてゐる間は、到底現代詩を理解する譯にはゆかないし、近ずいて行くことが出来ないといふことになる。「詩は誰にでもわかるものでなければ決して良い作品とは言へない」と云ふ言葉を某新聞で讀み、又兩三度きいた覚えがある。理想としてはそうあるべきだし、そうなる事に依つて詩の存在が肯定されることになるとは考へられる。

然し現代詩が誰にもわかる爲には、讀者其の者の文化的水準の向上と、就中鑑賞眼の向上とがきびしく要求されるのである。所謂それを解讀す可き準備が前提となるのである。最近しばしば「誰にでもわかる詩」とは、散文とちつとも變らない。要するに散文を詩の形式にまといあげたものを指呼するものであると云ふ私の言葉は、果して間違つてゐるであろうか？ 大正時代の自由詩の燒き直しのや、散文で書いても一向に差し支へないものを、わざわざ詩らしく見せようとするのは一種のナンセンスである。と同時に、それを掲載する新聞雑誌の權威を害ふものでもある。アブレゲル・ジャンナリストの教養の低さを暴露するものであると言へなくもない。かう強く私が叫ぶことは、指導性をもつジャンナリズムの覺醒を促したいからである。以上のやうな詩であるならば、現在のやうに紙代も印刷代も高い今日、相互良心的に之を取りやめる可きではあるまいか？ 所謂舊態依然たるこゝろ言つたものが、著しく詩の視野と進路を狭くし、後進者をして誤つた觀念に走らせる結果になる

が轉化した形に於て生きてゐることがわかる。當時に於ては之が詩のジャンルに屬してゐたばかりでなく、相當数の讀者の絶賛を浴びたであろうことは想像に難くない。然し此の詩を鑑賞しようとする時、今假に一篇の散文形式に隨つて書き流してみたとする。その時前者と後者が、どれだけの意味、(内容)の距りをもつかと云ふことが疑問になる。はつきり申し上げるならば、主觀の濃い感傷的な散文を詩らしく書いたものと云ふことになる。(最も詩は主觀の顯現であるが)確かに言葉の省略と觀念の止揚により、讀者にある暗示を與へ、讀者にそれに依つて自由なイメージに捉へて理解するといふ、象徵詩以後の行き方(現代詩の最前列に置かる可きもの)が、大正時代に散見した事實があるが故に、私が此の大正自由詩として引用したものが、其の時代の傑作ではないと斷つた理由である。

然らばかつての大正自由詩が、現代詩に飛躍する爲の必須條件は奈邊にあるか、と云ふ疑問が屹度想起される筈であるそれは要約して次の如く言へると思ふ。「説明的要素の省略」「觀念的觀念的なものからの脱皮」「韻律からイメージへ」「言葉の形象化」等々。これが將來どのやうに進展してゆくと云ふならば、以上の諸点(要約すれば一つとなるのだが)のより高度なるものへ……即ちその昇華であると考へられる。

此の事實に基いて云ふならば、感覺の甘さと感傷の醉にひ

のである。即ち現代詩はボエディによつて生れたものでなければ、ボエムではないと極論される所以である。ボエムはボエディの具現化であることを深く認識していただきたいと思ふものである。要するに之の體得が現代詩を解く鍵であるからである。ボエディの問題は今始められた問題ではなく、一九〇〇年代の詩人達が意識的に思索し始めてゐる。そこに今日の開花の前途があつた譯である。

諸君で手元にある郷土詩壇の作品を取り上げて、少しく説明を加へてみることにする。前以てお断りして置きたい事は私も詩の世界に彷徨獨の旅を續け、迂遠な廻り道ではあつたが苦しんできた積りだし、其の故にこそ書かれたる詩に對しては、飽く迄眞剣な態度で採り上げ、作者の勞作には深甚の理解と尊敬をもつものである。それと一篇の詩を以て其の價值如何を云ふし、優劣を規定する事は私の本意ではない。それは別に言いかへるならば、私の詩の一篇を以て輕々しく判斷されることは甚だ迷惑なことであるからである。私の意のあるところを諒とせられ、不遜な言葉を許していただきたい。作者に對して御寛恕を願ひつつ、私は讀者に現代詩のあり方を説明しなくてはならない。

一月三十日附「新生イワキ新報」所載。藤田氏作「愛と人生」を取り上げてみる。

愛 と 人 生

愛のない 世の中

一人は金持ちで

千人は、貧乏人

一人は毎日ニコ／＼笑つてゐるが

千人は毎日メソメソしてゐる

どつちが、いいのか、悪いのか、知らないけれど

此の社會の人々の肉體は

冷え切つて

暖かす Intell-Jence-Man

としての魂を

いだいてゐないと云ふ事は

事實だろう

空の太陽は

總てのものを平等に愛してゐる

空の太陽は總てのものを

あれが人間の

ほんとうの心なんだ

右は誌上に發表された其の儘を轉載したものである。これが現代詩の生態と見るならば、謬見も甚だしと言はねばならない。そして又散文詩とも絶体相容れるものではない。何故であろうか？之を今新聞、雑誌の記事に倣つて散文化してみよう。「愛の無い世の中、一人は金持ちで、千人は貧乏人、一人は毎日ニコ／＼笑つてゐるが、千人は毎日メソメソ

ソしてゐる。どつちが、いいのか悪いのか知らないけれど……」前者の如く行分けした場合と、今度の様に散文化した場合とで、一体どの様に違ふであろうか。私は敢て其の内容を同一と断定しなくてはならない事を悲しく思ふものである。詩が詩として獨立する爲には、詩と散文とが同一体であることは許されない。詩はどこ迄行つても詩でなくてはならないのである。詩は矢張り一つの型式に拘束されるものであるが故に、散文を読むと同じ態度ですらと読み流すべきものではない。一字一句噛みしめ、一行一行に立ち止つて精讀すべきものである。詩の一行は完全に獨立した意味を持つものであり、獨立した其の一行一行が共鳴し綜合されて、そこにふくいくとして匂ふものを内蔵する……そのみが現代詩なのである。私は數回に亘つて此の作品を繰り返し讀んで見たが、何等の印象と感銘を受けなかつた事を、正直に告白しなければならぬ。それは要するに、説明と繰返しに終始し観念的であり詩の生命であるところの、思ひ切つた省略がなされてゐない事が、氏の作品をこの様に弱くし散文化したと考へられるのである。私は此の詩に盛られてゐる内容に關して何も言はない。それは讀者自身がわかることと思ふからである。この様な散文を如何にも詩らしく見せようとする所にこの作者の失敗があつた。それと、インテリイ・デエンス・マンと英語をわざわざ御丁寧に挿入しなくてはならない理由が一体どこにあるであろうか。これは全く不自然であり何等の

深い意味を持つものではない。話を元へもどそう。私は今説明的観念的なものの思ひ切つた省略が絶体に必要であると強調した。それに就て作品に觸れ乍ら言及して見よう。惜此の作品からそれを拾ふとなれば、其の各行が非常に無駄の多い文章である上に、全面的に修正を加へねばならぬが、代表的な箇所を挙げるとすれば、「ニコニコ」「どつちが、いいのか悪いのか知らないけれど」「此の社會の」「いだいてゐないと云ふ事は事實だろう」「空の」「平等に愛してゐる」再び「空の」「あれが人間のほんとうの心なんだ」ざつとこ

う云ふことになる。「ニコ／＼笑つてゐる」と説明しなくとも、笑つてゐる丈で意味は充分汲み取れるし「ニコ／＼」を生かして「笑つてゐる」を省略するならば一層効果的である。「どつちが」と説明しなくとも、此の場合笑つてゐる人とメソメソしてゐる側の、この兩者の中の何れかを指してゐることに間違ひはないからである。上述の様に見れば、「此の」とわざ／＼前置しなくとも「社會」丈でりつぱに意味は通る。「空の」と冠詞をつけずとも太陽は常に空にある筈だ。

こう云ふと如何にも作者の言葉尻を掴まへて攻撃する様に聞こえるであろうが、これから詩を學び詩を書くとする人々の爲に、具体的に分析解明したまでであり、くどくどしい説明の省略が如何に重要であるかを、力説強張したかつたがためである。作者には痛烈に響く言葉ではあらうけれども、許して貰はねばならない。そう云ふと、難かしくて迎も詩作

等できるものではないと思ふかも知れないが、そんなに恐れる必要はない。今私が申し上げた点に留意されるならば、初心者も吟度うまい詩が書けるであろうことを信するものである。次に「港の灯」二月號所載。相澤氏の「豆白菊」を取り上げて見る。

豆 白 菊

日もさゝぬ裏の空地に

試みに植えた豆菊

日が立つにつれて

生活力の強い雑草の中に

其の姿はかくされてしまつた

夏が過ぎ秋が來た

意久地ない雑草は枯れて

忘れられてゐる豆菊

細く弱々しく生きてゐたのだ

たつた一輪白い花と咲いて

そつとひかえめに咲いた豆菊

その小さい花が大輪より

むしろ純情で愛らしく

まるであの娘の様に清く美しく

ほのかに温みさへもおぼへさせる

此の予情詩も端的に言ふならば、大正自由詩と何等擇ぶところは無い。試みに散文的に書き流してみると一目瞭然、前作と同じ様なものになる。唯藤田氏の作と比較して感じられることは、やわらかな純情な此の作者の魂に觸れることが出来ることである。素直な今の氣持で今後も詩作を続けられたい。嘘を云ふ事は禁物である。感じたまま、ありのままを書き出す事に出発せねばならない。このナイーブな作者の將來に期待するものである。それでは此の詩を少しく批評するならば前作と同様説明的要素が目につく。所謂私のつけた傍点を見れば直ぐ解ると思ふ。以上の部分を省略して、左に之を整理してみる。

日もさゝぬ裏の空地に
試みに植えた豆菊

日がたつにつれて

雑草の中に
其の姿はかくされてしまつた

秋が来た

雑草は枯れ

豆菊は

細く弱々しく生きてゐたのだ

たつた一輪白い花と咲いて

その小さい花が大輪より

純情で愛らしく

あの娘のやうに清く美しく

右の様に添削してみた。此の修正が完全でない事は勿論であるが、兎に角原作と比較して味讀していただきたい。幾分なりとも現代詩の香りがあると自負するものである。

此の詩で今一つ注意すべきは「生活力の強い」と「意久地ない」との意味の距りを吟味する必要があるといふことである。生活力の強いと言つた直ぐ後で、之を否定する言葉はこの一篇の詩を腰の弱いものにして居る。生活力が強いと云ふ事は積極的であるといふことであり、意久地ないと云ふ事は消極的であると言ふ事になる。故に逆比例する此の二つの言葉を使用了事は、詩の分裂を意味するものであると考へられなくもない。「忘れられてゐる白菊」と前章に言へば、少し詩に關心を持つ人ならばそれは「そつとひかえめに咲いた豆菊」を思ひ出す筈だ。故に第三聯の冒頭を全面的に削除した所以である。それと此の詩を讀んで「あの娘の様に清く美しく」迄くると、讀者はほのかに温みを自己の感覺の中に捉へる事が出来る。それを原作の様に説明したのは、イメージと餘韻が消されて了ふ。

…(以下次號)…

小説

報

恩

狐

鹿野卓二郎

(一)

黒岩仙藏は家代々の獵師である。

しかし、獵師と云つても、狩獵だけを稼業として暮しを立てゝ居るのではない。

田畑の耕作もすれば、炭も焼く、やがて、秋の收穫も終つて、遠く藥雷山がまづ白く、雪のペールを着る頃ともなれば愛用の獵銃を肩に、南澤続きの廣原村や、茶切原、又は二日も三日も泊りがけで、小野田村、宮崎村を経て、最早や山形境の藥雷山麓までも遠征して、山野溪澤に鳥獸をもとめて狩獵をするのである。

仙藏も亦因襲の家意に従つて、小學校の高等科を卒へた秋からは、父の丑吉の勢子として、紅葉の溪澤や雪の山野を馳驅して懸命に父の技倆を習得したので、山鳥の追ひ出しや、小鳥呼びなど實に妙を得たものであつた。

中でも射撃は名人と云はれ、近郷は云ふにおよばず、はるか船形や、新庄あたりにまでもその名聲を知られるやうになつたのである。こう云へば如何にも彼を過大に評價したやう

に聞こえるかも知れないが、全く仙藏の狙つた獲物は一發として無駄な彈道に消えてしまふことはないほどである。正に百發百中——平凡な表現ではあるが——。東洋と西洋、弓と鐵砲の差こそあれ、實際、今様ロビンフッドとでも云ふか、だから、今では彼等獵師達が集團で熊狩りとか、野猪狩りのやうな團體で獵をする時には、何時でもきまつて仙藏がその長に推されて、仲間指揮をとるのである。

御存知であらうが、此の地方には町家と云はず、農家と云はず。兎角例外なしに、家例(家意の類)と稱するものが未だに根強く残つてゐて、迷信を信じたくない吾々が、一寸考へると實に馬鹿々々しい話が随分あるが、黒岩家に於ても御多分に洩れず、そのタブーが守られてゐた。

黒岩家のタブーと云ふのは——子々孫々に至るまで、絶対に狐を捕へたり、射つたりすることはならぬのみならず、たとへそれが他家に於ての饗應であるにせよ、狐の肉を食することは、まかりならぬ……と云ふのである。

獵師と云ふ稼業にしては、甚だ迷惑至極のやうな家例が今尙嚴存して、それが累代犯すことなく、つゝましかに守り

通されて来てゐるのである。

美味でもない狐肉など、食はれないのはまあよいとしてもその毛皮の価値は相當なものであらうに、獵師の黒岩家だけが、どうして狐を捕つてはならないのだらうか？ そのタブーとなつた由來を仙藏は亡くなつた祖父の勘造から、幼ない頃によく聞かされたものだ。祖父が亡くなつた後は、父が代つて同じ話を仙藏や弟の誠に幾度も語り續けて來た。

兄と違つて、物事に一向無頓着な性質を持つた誠は、そんな話には少しも興味を持たず、小學校の四、五年頃には、「そんな馬鹿々々しい話ア、信じられんなヤ、文福茶釜みたいな話だベヤ」

そんなことを云つて、よく父に叱られたものである。仙藏にしたところで、現代の青年である。傳説による迷信や實話の差別がつかないではないけれども、黒岩家に傳はるお伽噺のやうな、家例の由來を信すべきか否かについては考へさせられることがないでもなかつた。

が、しかし、御先祖さまからのタブーである。悪いと云ふことを敢て行ふ必要はない。狐を捕らずとも、他に鳥獸は幾等でもゐる。國法を素す馬鹿者が多ければ多いほど、その國家が滅亡への一途を進る事は當然であるが如く、社會構成の細胞となつてゐる個々の人間の守則感が、麻痺して行くことは恐ろしいことだ。

たとへ、それがどんなにつまらぬ規則であるにせよ……

祖父も、父も守り通して來たタブーだ。しかもそれを守ることによつて、他に迷惑を及ぼすと云ふようなことではない……仙藏はさう考へてゐるのである。

誠は高等科を出て四年ばかりを、農耕や炭焼きの手傳ひをしてゐたが、肥田の田舎の生活が性に合はないらしく、S市で市電の運轉手をしてゐる従兄の信作をたよつて、同じ市電の車掌になつたのは、十九才の夏であつた。

父はこの轉職に眞向から反對したが、弟思ひの仙藏が、誠の希望を叶へさせるべく、母に協力を頼んで、反對の父をやうやく納得させたのである。

この頃から、無謀な戦争は日増し敗戦調を濃くするばかりで、大本營のラジオドラマが、勇壯な行進曲の伴奏を添へてニュースのやうな型式で、敗戦を覆つたものを、さも戦勝の如く一日に二回も三回もの放送をくり返してゐた。此の村にも毎日のやうに赤切符が發行された。大本營から放送されるラジオドラマに出演させられる青年俳優の無料乗車、乗船券である。この發行をうけた記名の青年達は、命がけで大本營のラジオドラマに出演しなくてはならないのである。若し、記名の赤切符を、定められた日時までに使用しなかつた場合には、國賊と云ふ汚名が着せられて、嚴罰が課せられるのだからたまつたものではない。

猫の手も借りたひと云ふ——收穫のさなかに、愈々仙藏にも赤切符が發行されたのである。

(二)

黒岩家の先祖は、今から約百年程前の甚兵衛と云ふ人で、妻の名をカヨと云つた。傳へられてゐるところによると、尾花澤在のマガギ、一五、六人から、十人位の集團をなして東北や、北陸地方のやうな雪國の山岳地帯の旅を續けながら熊狩りを専門にして、その皮や膽を賣つて生活をする人達であつたと云ふことである。

甚兵衛夫婦が、放浪生活のマガギ社會から足を洗つて、此の南澤を永住の地に定めて、尾花澤から移住したのが、約百年程の昔で、長女のカナメ七才、長男の勘彌が五才の時であつた。恰度その年の秋は奥州一帯の大饑饉で、人々の不安と焦燥は日増し濃くなるばかりであつた。しかし大自然の下した、苛酷な試練には、どう逆らうにも、逆らひきれぬものではなく、大崎耕土のやうに廣大な水田地でさへも、一粒の米さへ取れず、餓死するものが出たほどである。

甚兵衛夫婦が、懸命に丹誠した開墾地の粟や稗さへも、全く稔ることなく立ち枯れて、粟んぼと、稗んぼだけが、冬の薄の穂のやうに眞つすぐに立ち並んでゐるだけだつた。

併し、それでも五畝ばかりの傾斜地に蒔いた蕎麥だけが、どうにか結實したらしく、辛うじて五升ばかりの蕎麥粉を得ることが出來た。

これだけが次の收穫季までに與へられた親子四人の糧であ

るかと思ふと、つくづく天の無情をかこつて途方にくれたのは當然であつた。いかに天が下した試練とあきらめてはゐるものゝ、カヨは女だけに、思ひ出しては愚痴になることも亦無理からぬ話である。

「よそぐにさ來てまで、こんな苦勞すんならば、いつそ尾花澤サもどんべかなヤ」

甚兵衛としても、さう考へないでもなかつたが、そんなときには定つてカヨを慰めるやうに云ふのである。

「しやアないサ、ガス（饑饉）はこゝばりであんめいシ……尾花澤サもどつたとで、伊達や會津サ移つたとで、ドコもカクも一つことさ（同じ）」

「ホンダどもなア……わらしトモ（子供達）もぞく（不憫）でなヤ」

スーブのやうにうすい蕎麥かきに、山鬼の肉をぶつ切りにして入れた、あやしげな夕食の後など、チロ／＼と燃える踏ん込み爐の粗朶火にあたりながら、親子はそれ／＼の冥想にふけるのであつた。

憂鬱さうな親達の態度をみて、幼ないカナメや、勘彌までがその憂心に同調するやうに、不安さうな表情で兩親を見つめてゐる。そんな、いじらしい姿を見るにつけ、氣強いことは云ふものゝ、甚兵衛はジーンと鼻はしらを打たれたやうに眼頭がぼてつてきて、霧の夜空の星を眺めるが如く、粗朶火だけが、ポーッと、ぼやけて見えるのである。

「にッしやラ、（お前達）よつくと温まつたらナ、ワラワラ（早く）寝んだぞヤ、お父あナ、あしたになつたらば、おつきなムジナツコ捕つて来つからなヤ……」

甚兵衛はそんなことを云つて、此の場の氣もちを轉換せよとした。

「ウン、したら、あしたの晩ギにむじなるツコラんとたべんべなヤ、おど——」

つまらなさに、腹をあまりながら、燃えツ木じりをもてあそんでゐた勘彌が、父の言葉を聞くと同時に、素頓狂な叫びをあげたので、カヨとカナメがつられたやうに「フ、フ、フ、」と笑つてしまつた。甚兵衛も思はず、「ヒ、ヒ、ヒ」と、泣きたひやうな表情で笑つたが、その複雑な笑顔を、勘彌はキョトンとした眼つきで見守つてゐる。兎に角、今までの陰氣臭さかつた爐ばたの雰圍氣が、急に明るくなつたことは事實であつた。

「おらア、お母ツつあんと二人して、城下（町）サ、皮コ賣ツさいぐべなヤ、お母ツつあん」

カナメが、尻上りの言葉で勘彌に和しながら又ニツコとした。リンゴのやうなまつ赤な頬にえくぼが二ツ、ボツンと浮いて、ほのぐらい焚火に照らされながら揺れてゐる。

「おらもいぐツちやヤ……」

複雑な父の笑顔を見つめてゐた勘彌が、獨專的な姉の發言に不満らしく抗議を申込んだ。

「なにヤ……勘彌みたく小つちやコくつて。城下まであるけツカヤ、……なあヤおど」

「ナンボだつてあるけツさヤ、おら、おどと一緒に館までだつてあるつたことあつてヤ」

この幼ない辯士の論争を、甚兵衛もカヨも微笑ながら聞きいつてゐたが、このへんでいゝ加減に仲裁しないことには、勘彌の方の權幕がどうも穩やかでないらしい。

「やめろツちやヤそんなこと、姉弟けんかスツとナ、狼がきて二人とも取つて食ベツつオ、ホンだなヤ、おど……」

カヨがどつちつかずのコケおどしでたしなめた。

「ほんダ、ほんダ、けんかなんですんもんでないぞ、むじなコ捕つたらば、おども、おがも、勘彌も、カナメもみんなして城下さいぐべヤ、……したらばにッしやラサ、何かつてやんべがなヤ」

「おらア、アメコエツベかつてケロ」

「おらア、あけえイシヨコほスイなヤヤ」

「よし、いかんべ、買つてヤツからナ、さア、よつくと温たまつて、おとなしく寝ロ——」

父の約束に、二人ともやうやく納得したらしく、素直に寢床にもぐり込んだと思つたら、もうスヤ／＼と幽かな鼾をたて、寢入つてしまつた。子供なんて全く罪のないものだ。

(三)

翌日は珍らしく晴れわたつた心持よい秋日和で、道路も林もまつ白な霜の朝であつた。甚兵衛は早々に朝食を了へると鐵砲を肩に、愛犬のトモを連れて——シヤリツ、／＼と霜柱を踏みつけながら狩に出かけた。

處が、其の日はどうしたことか、午も、もうとうにまはつてゐるのに、兎一羽に出會ふことも出来なかつた。

昨夜子供達にあんな約束までしてゐるのに、このまゝかへつたなら、さぞかしがつかりすることであらう。いつもトモの姿が遠くから見ると、もう門口からとんでくる勘彌達の姿が、バノラマのやうに寫つては消えてゆく。しかし、まだ夕景までには時間もあることだし、歸へる迄には何かしら一匹位捕れないこともないだろう。——いづれにせよ盡めしをすましてからのことだ——と考へながら、

「トモ……悪日だなヤ今日ア、……どーれ、まゝでもたべもたべんべカ」

所在なさを愛犬に話しかけながら、甚兵衛は多々川つべりの玉石に腰をおろして、五目飯（實際見た目には五目飯のやうに、ほんの少しの主食の他に種々なものがまじつてゐた）の握りめしをかじりはじめた。處が、一つめをまだ半分も喰はない中に、川上の方で、トモがしきりに何かほへたてゐるのがある。

甚兵衛の胸は躍動した。スツ待望の獲物ごさんなれ、とばかり川上に向つてスツとんだ。が、そこには別段獲物らしい

ものは發見できずに、たゞ、三間幅程の新らしい崖崩れの爲に、直径二尺位の櫓の太木が、溪流に履ひかぶさるやうに倒れてゐる丈で、その根元の小砂利まじりの赤土の下から、三四十貫はあらうと思はれる砂岩がつき出たやうにのぞいてゐる。

トモは、その岩の下をさかんに前足でかきながらほえ續けるのであつた。

しめ々、むじなだなど直感した甚兵衛は、その周囲の状況を丹念に調べはじめた。岩の上下の土には、確かに獸の踏みつけた足跡がある。

しかし、雪とちがつて、小砂利まじりの土だけに、それが何の足跡であるのか判然としがたひが、むじなにしてみても足跡が大きすぎるやうな氣もする。そればかりではなく、土にめり込んでゐる櫓の根つコを無數にかじつてさへあるのだ。そのかじり具合をみても「こりやアどうしてもむじなではないらしい。——狐ツコだなこりやア……きつとニ、——崖崩れで埋つた、おかたツコ（妻）でも助けにくんだべヤ……」

甚兵衛は獨語しながら手頃の木を伐り、テコを作つて、先づ岩の取り除け作業にかゝつた。果してこの中に獲物がゐるとすれば、それが狐だらうが、むじなであらうが、若し飛び出してもしやうものなら、一撃のもとになぐり倒さうと、細心の注意をはらひながら、作業はすゝめられてゆく。萬一、

打ちそこなつたところで、さつきから獲物を狙つてゐるトモが、岩の上下を跳びまはつて嚴重な警戒をしてゐる。絶對といつてよい位に捕獲の自信が満ちてゐる。

懸命な作業によつて、はじめは相當の難事と思はれた大岩も、案外たやすく、グラツと左に傾いて、そこから小さな横穴が、ボカツと現れた。と、その瞬間である。崖上の方でガサツといふやうな音がしたと思つたが、——ウー、ワン——

崖上に向つて疾風のやうにトモが駆けあがると、殆んど同時であつた。

あッ崖の上にも獸が居る！ 併し崖上の獸が何であつたか甚兵衛には判らなかつたが、その方はトモに委せておいて、兎に角この穴の中を、一應の検索をせねばならぬと、視線を向けた。とたんに甚兵衛は拍子抜けの態で、

「なあーんダ」

と、吐き出すやうに云つたものだ。

瘡セツけた、猶位な大きな子狐が二匹、眼玉ばかりギョロリ／＼と光らせて、今岩を除けたばかりの、穴の入口にヒヨロ／＼と、ふらつきながら出てきたのである。

子狐は、甚兵衛を見ても、別に逃げやうともせず、さして恐ろしいと思ふ様子もない。イヤ、こう瘡せては、恐ろしくとも、又逃げやうにも、逃げる氣力がなないのかもしれない。たぶん、母狐が留守の間に崖崩れが起り、食物を持つてか

きくクローズアップされてくるのである。

……トモよ、どうか母狐を捕へないでくれ……つい先刻までは、穴の中の獸がたとへ何であらうとも、一撃のもとに打ちとるつもりで、張り切つてゐた甚兵衛が、半刻とたない今、こんな矛盾したきもちで祈るのであつた。

「なんばか、はらつコへつたベナ……ほんダ、まつてろヨ、今めしかせてやつからナ」

さう云つて、甚兵衛は先刻食事半ばでとんできた川原から、握りめしとおひつを持つて引返してきた。

子狐はキョトンとした眼つきで、穴の入口にフラツキながら、甚兵衛の手もとをながめてゐた。

「ホレ、まんまコ、けつからな、二匹してなかエぐだべんだゾ、晩ギナ（今夜）おつがアもかへんベヤ、ちゞツコ（乳）ウンと飲めて、なんボうれしかんベヤ……」

楢の小枝をたおつて葉をそろへ、その上に四ツの握飯と、ひつから出した兎の肉をつけて、ソーツと子狐の前に置いてやつた。子狐は鼻をヒクヒクさせて、にほひをかいてゐたが、兎肉の方からバクリツ、バクリツと美味さうに喰へはじめたのである。

恰度そのとき、川下の彼方から、力ない態度でスゴ／＼と戻つてくるトモの姿がみとめられた。獲物をとり逃がしたときは、いつでもきまつたやうに、トモが現はす申譯けなささうな態度である。

へる母狐を待ちながら、子狐だけがこの穴の中に、閉じ込められてしまつたのであらう。これを知つた母狐が、懸命に救出の方途を講じたのであらうが、畜生の悲しさに、岩穴の入口にドツカリと轉がつてゐる大岩を、どうにも處分できやう筈もなく、狐は狐なりに、楢の根ツコを噛みくだいたり、岩のまわりを、たゞ焦らだたく、うろつくことによつて、母性を愛を發揮するに止どまつてゐたに相違ないのだ。

そして今、人間が岩の取除け作業をしてゐる間も、自分の愛児がどうなることかと、悲痛な氣もちで崖上から監視してゐたのであらう。——それも不運にもトモに發見されて、可愛相に今追跡されてゐるのだ。

子を思ふ親の心に、人間も、畜生も變りのあらう筈はない強ひてその相違点を云ふならば、畜生の社會には、倫理とか道徳と云つた理念や觀念の持ち合せがない。だから彼らの戀愛は實に自由を超越した、もの凄いのであり、従つて子に對する愛情は幼兒の時代のみに於ての盲愛である。その盲愛によつて、生長した畜生は、やがて成年期に達すれば、今度は親子間に於て、はゞかるところなく、平然と戀愛が行はれるのであり、これが彼ら社會の輪廻である。こう比較してみるとき、人間社會にも、彼等の仲間が、絶對存在しないとは云へないのを惜げなく思ふ。

そんなことを考へながら甚兵衛は、自分の歸りを楽しみに待つてゐる勘彌達の、可憐な姿が、さつきとは別な意味で大

——トモの奴逃がしたな——よし／＼、それでいいのだ。

が、しかし、トモがこゝまで戻つてくれば、親を逃がした鬱憤を、數倍の怒りに變へて、おそろくこの子狐達を噛み殺してしまふであらう。そうだ、早いところ此の場を立ち去らなければならぬ。さう考へた甚兵衛は、

「おらア、かへつからナ、達者でおがれヨ（育て）」

素早やく身仕度をして、甚兵衛はその場をはなれて川下へくだつていつた。トモは、いかにも主人にすまぬらしく、クン／＼と鼻をならしてしほけかへつてゐる。

「よし／＼、いゝんダ、トモ今日はこれでかへんベヤ、あしたこそしつかり捕んべなヤ」

トモが川上の方へ注意をひかないやうにと、犬の素振りを氣にしなが、サツサと歸路についた。獲物一ツない今日一日ではあつたけれども、甚兵衛の心はむしろ明るく朗らかであつた。

その夜は夕刻から吹きはじめた風が、だん／＼と風速を増して、甚兵衛のアバラ家は、ミシリツ、／＼と無氣味な音をたて、揺り動かされる程強く吹きまつてゐた。

雜木林のたち騒ぐ風音が、暴風雨の海岸に逆巻く怒濤の潮鳴りのやうに、——ザ、アツ、ザアーツとうなり狂つてゐたその喧騒にまじつて、……キエン、キエン……と、狐の遠啼きが、かすかに聞えてくるやうな氣がした。五日前に火止めをした炭窯の小屋でも吹き倒されなければよいが、……

……と思ひながら、寝つかれないでゐた甚兵衛は、その啼き聲を聞くと、晝間の狐の母子のことを考へ出して、仲々眠りつくことができなかった。それでもやがてザツつく山鳴りを子守唄のやうに聞きながら、いつしかウトウトと夢路を辿つていつた。

(四)

氣にしてゐた炭焼き小屋は、屋根が二、三ヶ所吹きがさされてゐるだけで、幸ひ他には何の被害もうけてゐなかつた。

甚兵衛は朝仕事に屋根の修繕をすませて、窯の火止め口をしらべてみた。炭のむれ具合は上々である。この分なればあすは完全に窯あげができる、今日は炭俵の用意でもするとしやう。どれめしにでもするか、と、何げなく煙出しの方を見ただのである。

甚兵衛は、そこに毛皮のやうなものを発見したので、不思議に思ひながら近よつて見ると、それは毛皮ではなく、そろ／＼白色に變りかけた、大きな山兎である。二貫匁位はあるだらう、その大兎が、のど笛を囁み切られて、冷たくなつてゐるのである。

變な話があるものだ。トモが捕つたものとしたなら、必ず家まで持つてくる筈だ。しかしトモ獨りでこの炭窯までくることは、めつたにないことだ。が、いづれにしてもめつたものである。早起きは三文の得と云ふが、今朝は兎の得か。思

はぬ收穫に甚兵衛は、ほくそえみながら、兎をぶらさけて炭窯を降つた。

朝仕事かへりの甚兵衛が、大きな兎をぶらさけてゐるのを見て、カヨが變に思ひながら訊いた。

「ホオ……どこで捕つたのヤ？」

「捕つたんでねエ、ふろつたんだ」

「へエー、兎ンコ、おつてたなんてへんだなヤ、毒でも食つて死んだんでねエのかヤ？」

「ほんとでねエ、喉コ見ろヤ……囁み切られてゐんべ……なんか殺されたのヤ」

「ほんとダ、……イタツでねエカヤ……イタツつて、鶏コや、兎コ捕つたつて、肉ア食わねエで、血ばりするつて云ふんでねエカヤ？」

「なんだかナ、そんなところだベヤ」

いくら詮索したところで落し主の判からう筈もなく、兎はそのまゝ處分されてしまつた。窯あげの準備を了へて、寝についたのはその夜おそくであつた。昨夜どちがつて、風もなく、そこ冷へのする静がな晩であつたが、その静寂を破つてトモが狂つたやうにほへたてゐる。あまりに騒々しいので甚兵衛は表に出てみたが、甚兵衛の足もとに跳んできたトモが、しきりに尻尾を振つてゐるだけで、別に變つたことがありそうにもない。

「なんだ、トモ——喧ましくつて眠れねエでヤ、なんにもア

ンメエツチャ——だまつて寝ろハ」

甚兵衛は寝はぐれたまゝに、風の激しかつた前夜と共にとろ／＼二晩も續けて夜更かしをしてつたのである。

今日は愈々窯あげである。朝飯前の仕事にと、甚兵衛は炭スゴをうづ高く背負つて、炭窯に上つて行つたが、途中から点々と血が滴つてゐて、それがグツと炭窯の方へ續いてゐる不思議に思ひ乍らも、その血を辿るやうに甚兵衛は炭焼小屋に着いたのであるが、炭スゴを降ろすと直ぐ、甚兵衛はまるで意識したやうに、昨日兎の置いてあつた煙出しの方を見たと、ある。——やつぱりある。——昨日の兎からみれば稍小型ではあるが、同じやうに、喉を囁み切られてゐるだけで、そのまゝ置いてあるのである。

二日も續けて、しかも、同じやうな状態で喉を囁み切られただけの兎が、同じ炭窯の、同じ場所に轉がつて居るのだから、實以つておかしい事件と云へる。

何ものゝ仕業であらうか？ この炭窯に通じてゐる道に点々と、甚兵衛の家の近くまで血が垂れて居るのは何故だらうか？。いくら考へても甚兵衛には解せないのであるが、ともあれ、あてにもしない獲物が眼の前に轉がつてゐることだけは事實である。甚兵衛は、譯の判らぬまゝに、再度兎をぶらさげて戻つて來た。

カヨも、同じ出来事が二日も續いたことを不思議に思つてこの奇篤な贈り主が一体何者であるのか、しきりに考へてゐ

たが、フト奇妙なことを云ひ出したのである。

「狐ツコであんめエかした？」

「……まさか？……狐ツコだらば食つてしまんベヤ」

「だども、あんた（貴男）おとてな（一昨日）狐の子ツコ助けて、まんまコやつてきたべ」

「ウン……」

「その狐ツコの、がカツコ（母）でも、助けらつたお禮に持つてくんでねエがヤ……」

「ほんだらば、なんにも炭窯まで持つてがなくとも、おら家の木小屋コさでも置いていくベツチャヤ」

「よんベナ、トモめ、うんとほへたべ……あんどき、兎ンコくわえて來たんだベヤ……きつとニ」

「どうだかなヤ？」

「たスかに、おら、ほんだと思ふな、トモにほへらつて、おつかなくつて、家さこらんないんだべ、……その證據に家のそばまで血コ垂つてたベヤ……」

「なんだか、……おらもそんなふうと思へきたなヤ……そう云はれ、ば」

「ほんだ、……きつとほんだ、狐の恩返しなんて、昔からよくあるそうだからナ……」

「今夜から、トモんどこ、家ン中さつないでおいでみつカヤ——ためスに」

「その方アえ、ナ、せつかく恩返しに來る狐ツコ、もぞツコ

いからなヤ」

カヨは、山鬼の贈り主が確かに狐であると、もうすつかり思ひ込んでしまつてゐる。

その夜から、甚兵衛夫婦の合議によつて、トモは家の中に繋がることになつた。次の朝、好奇心も手傳つて、小暗い中に起き出た甚兵衛が、半信半疑に表戸を開けると、びつくりして眼を見張つたのである。正にカヨの想定が適中したのである。――甚兵衛の目の前には、羽の色彩もあざやかな大型の雄が、ドサリと一羽置いてあつて、さわつてみると、まだホヤツとなま温かみさへ残つてゐる。

「捕つたバリの雄ツコだナ……」

この温かみからみれば、まだ此の邊に是の贈主があるかもしれない。そう考へた甚兵衛は前庭へとび出して、探るやうにあたりを見廻した視線を、向ひ山の雑木林の方へむけて、感心したやうに嘆息を洩らしたのである。その雑木林の麓を流れる小川の淵を、子牛ぐらいもあらうかと思はれる大きな赤狐が、モツサリと太い尻尾を引づるやうにして、甚兵衛の方を振り向き、川上さして上つて行くのが認められたからである。

「フウム！、狐ツコの恩返しツて、やつぱし本當にあんだなヤ……」

果して、それ以來、雨の日も風の日も、決つて毎日のやうに、雉、山鳥、兎と、結構な贈物が届けられて、しかもそれ

が、一年近くも缺かさず続けられたのである。御蔭でさしもの饑饉にもかゝらず、甚兵衛一家は経済や、食糧にも恵まれて、餓死することもなく、代々黒岩家は榮えて來たのである。

故に、黒岩家に於ては、累代、狐を捕獲したり、又、その肉を食することは堅く禁ぜられ、所謂狐禁獵の家例に定められたと云ふことである。

――(未完)――

スケターワルツ

相澤 庄一

芝浦のスケート場

あの廣い銀盤の真中で

ピンクのセーターに

白い小さなフイギヤーをはいて

いつも踊つて居ました

何處の誰れか知りませんが

私は貴女のまわりを

一人の所在なさに

あのワルツに乗つて

たゞ何んとなく

滑つて居りましたつけ

小名濱町信用組合

石城郡小名濱町横町
電話(小名濱)一一二番

組合長 志賀 要平
専務理事 福尾伊太郎

土木建築請負

三崎組

組長 太田 勝康
石城郡小名濱町隼人
事務所 電話五〇番
自宅 電話二〇二番

看板
塗装 請負

水野塗装店

水野 峯次

小名濱町蛭川南五四

雜貨、食料品、青果

柳仙太郎商店

柳 定子
小名濱町須賀町(驛前通り)
電話(小名濱)三五一番

魅力伴ふ二十（はたち）過ぎ

三船敏郎のゼスチャー

様子如何にと、うかゞへり

彼女少しは、いぶかるも

とは云ふものゝ「コロ／＼」と

欠勤届は風邪（かぜ）の由

「まあ！Tさんの嬉しいわ！」

お尻の形も愛らしき
彼女について上りゆく
畳も青き六疊間
明るい感じの部屋なりき

(十七)

瀬戸の火鉢は小型なり
すぐに出された絹座布團
赤い布團は彼女なり
それがし窓際に進み寄り
遙るかの方(かた)を眺むれば
「赤井嶽から姉ちゃんよ」
「あゝ姉ちゃんよ」の赤い嶽

(十八)

火鉢を夾み向ひ合ふ
ます床の間に目をやれば
松竹梅を活けたりぬ
窓際の机、新らしく
机の上の調度品
品(ひん)良き本箱の備へ有り
教養さこそ知られたる

(十九)

美しきボータブルより目をそらし
彼女の瞳とカチ合へば

愛の微笑みかはすのみ
和服姿の川口嬢
珍らしくこそ眺めたり
コーヒ入れしその後を
さも恥かしげに咬きぬ

(二十)

「妾、まるで夢のよう！」
「何が一体夢ですか？」
「だつてエーまさかTさんが
妾の、ところへなぞこようとは……」
「何を云ふんです初江さん
貴女の入社のそれ以来
如何に僕が愛したか！」

(二十一)

「そのお言葉は嬉しいわ
でも妾は信じません！」
思はづ彼女ににぎり寄り
可愛い、両手を握りしめ
「そりや聞えませぬ初枝さま
是程愛する此の僕を
何故に信じて呉れませんか？」

(二十二)

「だつてエー」と彼女涙ぐみ

「貴男の様なハンサムが
リーベが無いと思へません！」
「あゝ無理もない仰せです
僕は誰にも云はれます
併し眞面目な男子です
戀愛の経験とて御座いません」

(二十三)

「本當にそうなら嬉しいわ
妾、はじめて會つた時
好印象を受けたのよ
家へ歸つて一人して
貴男の事を思つたの！
思ひ叶はぬゆめなら
何故に咬いたか此の胸に」

(二十四)

此の喜びを天に謝す
彼女に劣らぬ愛情は
割つて見せ度い胸のうち
「あの日から人しれず咬いた花」
今日此の膝に咬こうとは
その儘、彼女をいだし寄せ
ツト口唇を求めたり

(二十五)

彼女、感動にをのゝきつ

でも、乙女心の恥らしいに
染めたる頬をそらせつゝ

「ねえ、待つて頂戴それ丈は！」

「待つておとめなされしは
一体何故で御座ります？」

腕ゆるめず問ひ寄せぬ

(二十六)

まつ毛、しめして彼女云ふ
「二人が結婚する迄は
互に清く有り度いわ！」
「何を云ふんです是くらゐ
貴女に愛が有るならば
許して呉れてもいいでせう！
信じられない君の愛！」

(二十七)

彼女は我れに取り縋り
「愛してゐるのよ、こんなにも
許せないのが悲しいわ
判つて頂戴此の心！
いゑ、もういゝわ許します
でも妾は知らないの
凡てを貴男に委せます」

(二十八)

「有り難う、初枝さん
僕も立派な男子です
必ず責任とりますぞ！」
花の口唇むさぼれば
彼女も負けちと取りすが
此の幸福と情熱は
次、一線を越すならん

(二十九)

「なに、道なかでやつてんだい！
右か左へどかねえか！
背後にブー／＼音の有り
我れバツとして見返へれば
トラック一台迫り居て
彼女の幻影砕け去り
しげ面男がわめきけり

(三十)

彼女の家を深しあて
その門口に立ちたりき
思ひの他に古き家
二階ならざる平家なり
「川口」と文書かれたり
薪うづ高く積み重ね

下駄四五足が飛び散りぬ

(三十一)

愉快ならざる氣持ちなり
頼むわ彼女の笑顔のみ
「御免下さい」と聲かけぬ
それに答へて聲の有り
「回覧板なら置いてきな」
思ひ掛けない男ゑ
聲の調子も若かりき

(三十二)

ハテナ？ 見貴は居らぬ筈
「回覧板では御座いません」
ふくれてしぶ／＼答へたり
やがて、づし／＼足の音
破れし襪、引き開けて
一人の男突立ちて
睨むが如く見をろしぬ

(三十三)

久留米がすりの上下に
黒き兵児帯巻きつけて
學生時代をしのばせつ
長き髪にも、くし入れず
色青白く無精しげ

萬年筆を手にせるは
詩人か文士と見受けたり

(三四)

「何御用です？どちらから？」
「川口さんは居りますか？」

「僕、川口です。どなたです？」

「川口さんは女です……？」

「あ、アレの事です。」

「をいッ！」と奥へ、わめきけり

「はい」と答へて彼女出づ

(三五)

「アラTさんなの、よく来たわ

貴男、此の人同じ課の

Tと云はれる方(かた)なのよ

アラ、こいつはとんでもない

こんな筈ではなかりしに

ふくれ返りて聲もなし

(三六)

「家内がお世話に成りますなア」

我れ、まご／＼と頭下げ

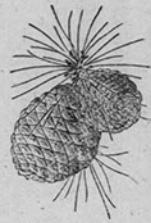
「はちめて御無沙汰致します

では又來ます左様なら」

二人の聲を後にして

ぬかるみ道に涙ぐむ

あゝ、又も女性に裏切りぬ！



世事「三代目」考

東 義 將

一般に云ふ「雜誌三卷」が必ずしも三號を意味したものでない事は前號に述べた通りである。併し發刊された雜誌が、三號目位から難色を示す事は事實であり、本誌も三號に至つて、一層その輕重を問はれ、此の三號がものを云ふ事も又確かであろう。

處では一軒の家に見ても、その家を完全に將來永く維持させて行くか、あるいは衰微させ、若しくは是を型無しに潰してしまふかは、確かにかゝつて、三代目の主(あるじ)の人物如何にある事は、世論が是を等しく認める處である。古川柳にも「賣家と唐様に書く三代目」とあるが如くである。

併し三代目とは別に血統を云つたわけではなく、一人の人物が家を興し、家名を挙げ、あるいは大きな財産を作つたとかの場合、而してその家が、子から孫へと續いて行く時に、世間は是を、はじめの人に對して、二代目、三代目との見方をするのが常識である。

家業？三代目を美事にやつてのけて、世論に大いに譽められてゐる代表的人物は、何と云つても徳川三代將軍家光であ

來春感想

二本松 田中八十翁

春が來た軒端ニ犬ノ日向寝。庭ノ梅花フクイクトシテ香ヲ送り、一聲黃鳥春ヲ報ズレバ、門田ノ白雪漸ク消へ、鏡ノ如キ地面ノ氷解、青柳、楠ケツル風。春ノ川ヲ流ル、水、實ニ春眠曉ヲ覺エザル好時節。野山ニサエズル鳥ノ聲、牛ハ堤ニ眠リ、千草ノ翠葉愛スベキ、未タ初蝶ノ見エザルトモ、天晴レ風靜カナル日、ヤ、暖味ヲ感じ、知友三四人ト杖ヲ野外ニ曳キ各々飄々腰ニシ、筆ヲ懷中ニシ、或ハ賦シ或ハ詠ジ其ノ快樂極リナシ。霞タル遠山眼界ノ長閑サノ春實ニ心地良シト思ハル

麥 踏 み

庭先の梅に來て鳴く小鳥かな

朝のちら雪

朝ぼらけ向ふ端山を眺むれば月影映る雪に美し

港の灯所載「恐怖の十三分間」に寄す

淋しさや降り残りたる汽車の窓乗り來る人は鬼か佛か

同「吹雪を衝く」に寄す

逢ひて見て語り會ひたる戀人と汽車の別れに何時逢へるかも戀しさに今も見て來た垣の根に色だけ咲きし水仙の花

る。家光が確かに凡庸でなかつたものには相違ないが、併しあの人が大分得(とく)をしてゐるのは何と云つても祖父家康が、在世中に將軍職を秀忠に譲つて、大御所として駿府(現静岡市)から目を光らしてゐて呉れた事が、家光の代に迄、大いに利益を爲した事は否定出来ない事なのである。家光が將軍職に就く迄、家康が在世してゐたと云ふのではないが、併し上記に對してはいくらでも是を引例は出来るが、茲では必要がないから省略する。併し三代目で家を潰すも興すも、決して三代目ばかりの責任でもなく、やはり、二代目の人物如何が相當影響する事も確かである様だ。徳川二代將軍秀忠にしろ、相當、父家康と共に苦勞もしたし——それは親父の様に幼少の頃から人質の味などは知らなかつたが——豪い親父の跡を繼いだ丈に大しては光らなかつたが、決して暗愚な人物ではなかつた様である。それ故に家光に至つて、徳川十五代の基礎を一層強化する事が出来たものに相違ない。

藤原氏の祖が例の中臣鎌足、即ち拾圓札でお馴染だつた藤原鎌足であるが、此の家は、此の人の大化の改新の功に寄つ

て、子孫はすつかり時の特權階級に化けてしまつて、鎌足の娘、光明皇后以來、殆どその後の皇后のお里の様に成つてしまつたので、代々の主が、馬鹿でも利巧でも變りなく、一家が繁榮するばかりであつた。繁榮處か道長をして「此の世をば我世とぞ思ふもち月のかけたる事もなしと思へば」なぞと我々の世界では想像もつかない大それた歌を作らせてしまつた。何しろ、官職財産、共に世襲で、それも莫大なものだつたと云ふからたまつたものではない。無論特權階級だから、先祖の鎌足が作つた法律の中に「税」と云ふ事はあつても、彼等は決して是を實行しなかつた。そこで宇多天皇が口惜しがつて、此の勢力に對抗さす爲に連れて來たのが、菅原道真即ち天神様である。天神様を右大臣に任じて見たがやつぱり駄目だつた。五十余才の道真も三十前の若僧、左大臣時平には齒が立たなく、逆に筑前の國太宰府に流される事になつてしまつた。天神様も仕方なく、「東風吹かばにほひを起せ梅の花——」位の歌を作つて、遂に九州に追はれてしまつたのである。九州に送つた位で、流したつもりであつたのだから、當時の朝廷の勢力範圍も押して知るべきものがある。道真が九州で、十五夜のお月様を眺めて、「去年の今夜、清涼に待す——」と今度は詩をやつた事も有名であるが、兎に角同人雜誌の様な人物であつた。尤もそれ故に今日、天神様として學問の神様に納まり、遂、先の日迄は五圓紙幣に威容を示してゐた。併し宇多天皇の計らいが原因して、あの絢爛たる芝

居の、梅王、松王、櫻丸の「車曳き」や、女房喜べの「寺小屋」などが出来上つたのだから、芝居道の人たる者、宜しく宇多天皇に感謝すべきである。宇多天皇の後を繼いだのが、醍醐天皇で、寒夜に上衣を抜いで、下々（しもん）の寒さを察して呉れた人情天皇である。源家に至つては義家當時と頼朝時代とあり、いづれを三代目となすか、残念乍ら筆者の常識では掴へ處がない。そこへ行くと平家の方が大分此の点がつきりしてゐる。平家は先づ、昇殿の光榮を得た平將軍忠盛をもつて、平家興隆の祖と見るのが至當である。さすれば清盛が二代目、即ち三代目の宗盛に至つて、遂に潰れる處か壇の浦の肩と消へてしまつたのだ。宗盛の倅に惟盛があるが、どうも是は一人前に抜かい憎い。併し平家三代目は本當は重盛であつた。重盛こそ確かに明君で有り、仁の人であつたが、惜しいかな、父清盛より先に死んでしまつた。もし此の人がもつと長命したとしたら、あの當時の日本歴史は若干の變化を見たであらう事は、何人も否定出来ない事であらう。弟の宗盛などは、芝居では提燈屋の倅の如く扱はれてゐる。北條氏の三代目は泰時である。此の人こそ實に秀れた人で筆者は泰時を恭謙にして仁愛と教へられた様に記憶してゐる。しかも性、無慾で、天下に質素儉約の範を垂れた人である。當時の名門としては、とても、やれる事では無かつた筈だ。例の障子の切り張りの元祖、質素儉約の代名詞の様な松下禪尼は、確か上記泰時の倅の嫁だと記憶してゐる。此の時代は

後家さんに成ると佛門に歸依して、尼さんに成つたものらしく、例の嫌々天下の見本の様な、北條時政の娘で源頼朝の妻政子の如きも、尼に成つてからも、政治に口ばしを入れたので、尼將軍の稱がある。今日尚、横濱の井土ヶ谷に、尼將軍と云ふお堂が残つてゐて、緣日には參詣の人の跡を絶たない政子の終焉の地とか聞いてゐた。併し北條氏位、傑出した人物の出た家柄は史上に一寸珍らしい。只義時が歴史上に足利尊氏と肩を並べて、不忠の代表者の如くに云はれてゐるので北條氏は大分割が悪いが、北條氏も泰時や「鉢の木」の最明寺入道時頼、その子相模太郎時宗などは、筆者ならずとも世人の好感を持つ人物である筈だ。

併し北條氏が朝命に抗したのは、北條氏のトリックによつて、源家が斷絶した後に、朝廷から、北條氏に政治をとる權利なしと見なされて、朝廷から、政權を返へせと云はれたのを返へさなかつた事に原因するのである。併し、義時、泰時の父子さへ、錦旗には双方向氣持ちは持たなかつたと云ふのだから、恕すべき点もある。故に北條氏は代々名丈の將軍を迎へて、世々、執權と云ふ立場にあつて、自ら將軍とは稱さなかつた。名より實を採つた家である。併し、時宗の代の國難を思へば、北條氏なればこそ、あの難關を切り抜ける事が出来たのであらうが、もし朝廷に政治の實權が歸つてゐたとしたら、あの時で、日本の國がどうなつてゐたか判つたものではない。その点で北條氏には感謝はするが、その變り「神

風」なんて妙なものを流行（はやらせ）られて、後世の今日に至つて、大變な迷惑を蒙らうとは思はなかつた。

足利三代目が、金閣寺建立で有名な義満である、足利氏も不忠の代表の如く云はれてゐるが、今日だからこそ云へる言葉ではあるが、是も又根底を衝いた正しい見方でもないのである。又此の時代位文化に貢獻された時代も一寸尠く、當時の「明」即ち現在の中華民國と交流したのも義満の時代からである。但し此の義満は、明の國王から「日本國王に補すから忠義を勵め」などとの手紙を貰つて、満足してゐたのだから、日本歴史の上から見たら決して好感の持てる人物ではない。此の義満の代に、祖父の尊氏が追い廻して吉野に淋しく生活してゐた後醍醐天皇の子孫を、即ち南朝の天皇を迎へて北朝に合休させたものである。併し是は事實は休裁で、實際は、南朝で天皇なりと稱してゐた人をだまして、京都に呼び寄せて、三種の神器なるものを取り上げたのが此の義満のやつた本當の事である。即ち南朝、後龜山天皇の時代であるが後龜山天皇と、それに付き従つてゐた人々は、義満の巧妙な言葉につられて、疎開先の吉野から輦れの京都に歸つて來たが、その轉入の届けを済ますと同時に、三種の神器を取り上げられて、後龜山天皇は、足利尊氏が作り上げた天皇の子孫に位を譲らせられた。即ち後小松天皇である。是を以つて、遂に南朝が途絶へたのが本當であり、史家は南朝をもつて、正統としてゐる「歌書よりも軍書に悲し吉野山」なぞの句も

ちつと味はへば、そこに南朝に對する同情と云ふものを織込まれてゐる事を感じるのである。現在の天皇が足利尊氏作製の天皇の末孫である事は何人も知ることではある。併し南朝も北朝も天皇の血統の上に於ては、日本人は何等の疑義を夾む必要はないのである。併し元はこんな事を書くこと、警察へ引つばられて、すぐに牢屋に入れられたものである。曾ての中島商相が、大臣からすべり落とされて國賊呼ばれりをして、我こそは眞の天皇なりと、熊澤天皇なんて人が現はれた位だから大した事はない。

併し、足利尊氏を大不忠の人間とする限り、南朝が正しいと解釋するのは當然で、むしろ皇居前に、南朝の忠臣楠木正成の像を置いた事からして、大きな矛盾であつたのだ。正成もあそこゐて、づい分くすむつたい思いをした事であろうが、現在の様に男女のランデブーを見下したり、いたづら小僧に馬の相乗りをされたりして、それでこそ、さぞ、はじめでホツとした氣持ちに成つた事で有らうと思ふ。

併し明治に至つて作り上げた日本歴史も、あそここの所は、學者も大分苦勞をしたらしく、我々が教育を受けた時代には天皇の實權が、遂に南朝から北朝に渡る所を、例へば小學校なら、五年生と六年生の移り變りに持つて行つて、生徒の虚に乗じて、必ず、ばやけさした教育振りをしたものであつた是(ぜ)を是としないうちに實にするやり方である。

併し、我々は現在の天皇が南朝の末孫であらうがなからうが、今更そんな事はどうでも良いのである。併し筆者の天皇尊宗は徒に神がかゝりのものではない。しからば何故にどうでも良いのか？ 即ち我々日本人の觀念の中には、明治大帝への敬慕の情が旺盛なのである。勿論先帝、今上に對しての親しみ徳しみも元よりであらう。筆者などもその一人であるが、明治天皇に對する感情は是を意識するとならないとを問はづ、現在の日本人の持つ潜在的の考へではあるまいか。それなればこそ、史上では、南朝に好感を持つ日本人も實際にはその末裔なりと名乗る熊澤天皇なぞと云ふのが現はれても、是を齒牙にもかけないばかりか、むしろ不愉快としての感情を抱く人が多いのである。

成程、明治大帝以前にも、確かに天皇は存在はしてゐる。又、後小松天皇以來も何等變り無く國民の尊崇の的となつて來た事も事實で、又大過なく現世に至つた功實も偉大である但し、徳川八百萬石に對して、僅かに十萬石の手當で朝廷は困窮しきつて、只潰れずにゐた丈の事との感も深いのだ。尤も、朝廷に對して、潰さず伸ばさずの政策が、徳川代々の將軍が採つて來た卑劣なる方針でもあり家憲でもあつたのだ。それ故に朝臣も苦しくて、遂にバン／＼の先祖の辻君なる語原を生む結果を見たり、花札なぞと云ふろくな物でないものゝ内職に勵んだりして、今でも花札の作製は京都が日本一だが、そんな技術を残したりしたものだ。國を一軒の家として見

た場合、明治大帝が、衰微したものを前例の無い興隆をさせたのだから、その意味で大帝を初代と見て現在の天皇が三代目であるとの見方も決して出駄良目ではあるまいと思ふ。尤も實際問題から云つても、今上を以つて、百二十四代なりなぞとの、とられた考へを持つてゐる人は今では尠いものではあるまいか。第一、我々の子供の時代には、今上は百二十三代と教へられたものである。處が筆者が二十才の拾月と記憶してゐるが、即ち大正十五年の秋に、學者の研究で、南朝の中に、長慶天皇と云ふ人が居たと云ふので、提燈行列で天皇を一人増やしたのである。確か、後醍醐天皇の孫と發表された様に記憶してゐる。併し當時二十才だつた筆者は、それ迄殆ど無關心だつた日本歴史に、甚だ疑惑を持ちはじめた。何しろ當時は筆者も向學心も旺盛だつたし「末は辯護士」に位の野心を持つてゐた時なので、早速改めて日本歴史の再検討研究をはじめたものであつた。古文學に親しんだのも此の時代からである。處が調べれば調べる程、いろ／＼とアラも出て來た。今日、共產黨系の人の執筆に成る歴代天皇のアラなぞも、筆者は殆ど先刻承知の事ばかりである。實は二十二才の初年兵の時に、既に紀元二千六百年に近い當時の年代の數字を否定して、是を兵隊仲間にしやべつて、遂に中隊長の知る處となり、約二時間中隊長の前で日本歴史をしやべつて、やつと許された經驗を持つてゐる。その變り、その後は妙な色目鏡で見られて、相當の不自由はした。敗戦後の今日では

二千六百余年を丸呑みに信じる人は先づ稀であらうが、元來我國の二千六百年と稱する年月の中、約千二百何十年迄は文字が無かつたのである。いや千二百何十年迄文字が無かつたと云ふわけではないが、それ以前に渡來した文字と云ふものは極めて限定された不自由のものであつた事は當然であらう。元來我國の文字の渡來は、人皇十五代應神天皇の八十四年に、百濟王が「王仁」と云ふ學者を日本に差向けて、その王仁が論語十卷千字文一卷を持つて來たのが我國への漢字の渡來の第一回である。紀元九百六十年の頃の事なりと筆者は是を記憶してゐる。併し此の時に文字が渡來したからと云つて直ちに文字が使ひはじめられたわけでもなく、又文字の研究即ち學問が盛に成つたとも史上には見る事が出來ないのだ。何と云つても學問が盛に成つたとは、その次の確然と文字の大量渡來を物語つてゐる、佛教傳來以後の事である。佛教の傳來は、即ち「二一、二二」で覚え込まれる紀元千二百二十二年人皇二十九代欽明天皇の時代で、佛像に添へて多くの經文が同じく百濟王から贈られて來たのである。併し、ついだから申上るが、佛教が我國に傳はつたのを是を以つて最初の事なりと解釋を下すのに誤りである。成程朝廷に對して佛像が送られたのは是が初めてではあるが、併し民間には既にある程度佛教は擴まつてゐたのである。當時、既に大陸民族(朝鮮)と交流があり、その大量の浸潤を受けてゐた事も確かだ、それ等に寄つて、廣められたと解釋するが本當であら

う。何如と成れば、今日發掘される古代の遺物の中に、古代

の寺の建築の様式の一部に裝飾に使はれたと解する鈴形の青銅器を見る事が出来るが、それ等の物から年代を推定すると、佛教傳來を物語る紀元千二百十二年より、遙かに古い時代であるとの事である。尤も一ツの宗教が王朝によつて廣められたなどとの事は古今、東西を通じてそんな莫迦げた事はあるものではない。併しそれはいづれにしても、佛教傳來未以後は學問も盛に成り、推古帝の時には、聖德太子の様な人物も現はれて、個條書ではあるが、十八條の憲法さへある位である。推古天皇は、佛教傳來當時の欽明天皇から數へて四代目ではあるが、年數では僅々三十年の人である。

併し文字がその以前の、即ち文字を使はれなかつた時代の事を記したのは、それから又、百五、六十年も経つてからの事である。即ち元明天皇(紀元一、三六七年より一、三七五年)の和銅四年九月十八日に太安萬侶(おほのやすまろ)が勅を奉じて巽に天武天皇の口授により、稗田阿禮が誦習した過去の事柄を集録して、書物として、習年の正月二十八日に功成つて、是を奉つたものであり、即ち我國の開びやくの初めより推古天皇に至る歴史の事跡を録し、以つて出来上つたものが、我國最初の史籍三卷古事記であるのだ。

古事記の文章は全文漢文で、傳説中の歌謡の如きは漢文の音讀みで古語のまゝに記してある。併し古事記は史籍としてより、むしろ文學上に千古不朽の價值を持つものである。

武天皇が、大和の橿原で即位の式を挙げ、はじめて大尊長としての名乗りを擧げた時に始まるのであるのだ。それが現實に行はれたとして、諸氏は一体その時に於て神武天皇は、幾才位の年輩だつたと思はれるか。驚く勿れ四十五才であるしかも安藝に七年吉備に八年前後十五年の歲月を闊して大和迄攻めて來て、六十才で即位した人が、尙七十六年在位されたのだ。正に怪奇である。

處が文字の第一回の渡來の應神天皇の次の十六代仁德天皇以降を見ると、此の矛盾が殆どなくなつてゐるのである。各天皇の在位が常識的年數であるのだ。筆者が上記の如き解釋をなす所以も其處にあるのである。第一、十六代仁德天皇は、何人も御存知の「高き屋に登りて見れば煙り立つ——」の是亦人情の天皇で名のある人だが、此の時代に文字を用ひなかつたとする、此の時代は、歌を讀む事は知つてゐても書き止める事を知らなかつたと云ふ矛盾した事になるのだ。勿論歌(形態を成したものの)などが作られる事があつたわけのものでもなく、筆者は後代の人間が仁德天皇に作つて與へたものと、昔から思ひ込んでゐる。仁德天皇がそれらしい事を云つたのかも知れないが、傳承された素戔鳴尊の太蛇(鰐賊)退治の後で、喜んで口にしたとか云ふ例の八の字ばかりの妙な歌?とは大分異ふ。その三百五十年も後に作つた古事記さへ漢字の音讀みで、現在の假名の様に當てゐる不自由さであるのだ。

註、上記、元明天皇の活字より、此の章の古事記に關する記事は、小名濱町第二小學校、増子校長の厚意により、同校藏所閱覽に依るものである。尙、同校藏書に依れば「古事記に關し、註釋書多き中に、本居宣長の古事記傳四十卷を白眉とする」と有るので、參考迄に付記する。

併し元明天皇と云へば、奈良の都を定めた人で、當時は相當の文化も進んでゐたのであらうし、無論文字を含めての事であるが、何故に早くその以前の天皇が、前記の古事記の事を行はなかつたのかと、筆者は是を不思議に思ふのである。併し筆者は、その以前の人皇十五代の應神天皇の御代に來つた論語十卷千字文一卷なるものも、決して無駄にされてはゐなかつたとの考へを持つてゐる。是は些か筆者の大膽なる解釋ではあるが、併しその事情を説明申上げると、應神天皇は神武天皇から數へてたつた十五人目の天皇である。併し此の天皇の時に王仁が書物を持つて來たのは紀元九百六十七年頃となつてゐる。さすれば此の紀元の九百六十年を十五人の天皇の十五の數字で割ると、そこに六十四と云ふ數字が立つのである。即ちそれ〴〵の天皇の在位が平均六十四年と云ふ事になるのだ。併し、人間の壽命から云つて、こんな莫迦げた事があるわけのものではなく、確かにもつと〴〵短かつたものに相違ないのである。應神天皇の如き是在位百十年と記憶をしてゐるしその以前にも在位百年以上と云ふ人も數人はあつた筈である。神武天皇が在位七十六年であるが、是などは實に馬鹿〴〵しい事も甚だしい。第一紀元元年とは、神

此の様に日本歴史も上代は、實に〴〵迦滅のものであつたのだが、誰も此の誤りを承知してゐて指摘せず、國民に教育してゐたのだから、實に情けないものである。學者によつては、いはゆる天孫降臨をユダヤの潰滅の年代に結び付け、天孫民族をユダヤ人が東漸西漸した中の、東漸した民族なりと是を解釋した人があつた。歴代天皇の、神武、綏靖、安寧などの文字は、當然後から當てはめたものではあるが、上記の學者の説によると、神武はデム。安寧はアンネイ。一寸下つて垂仁はスイニイと云つた具合に、こうやると古いユダヤ名に大分當てはまるのだそうである。第一、日本人の容現の中、鼻の形の余り譽めたもので無いところなぞも、ユダヤ系に屬するのだそうである。併し、大して有難い事でもなし、又別に筆者が提唱した事でもないから、是は信じて呉れなくとも宜しい。此の様に日本歴史も、外國に指圖を受ける迄も無く早くに自發的に改めるべきが本當だつたのである。徒らに古きばかりを誇らうとした事が大きな誤りだつたのだ。

その意味は別としても、國を興した明治大帝から數へて、現在の天皇を一般に世間で云ふ處の三代目と見ても誤つた見方ではなからうと思ふ。然りとして、三代目の今上が、今日その方針を誤つたのか、誤まらなかつたのは、是は後世の史家に委ねべき問題で、徒らに今日は論じるのは早計であると思ふ。又三代目の動きの影響に、二代目の人物が相當もの云ふ事も前述した通りだが、三代目の現在の天皇に對し、

二代目である大正天皇が秀れてゐたとかゐないとかの問題は別として虚弱と云ふ悪いハンデキャップを持つて居られた事は事實である。それに先帝にしろ、今上にしろ、實際、家來にロクなのが居なかつたのだ。只お氣の毒と申上るより他に言葉が無い。大正天皇の時代の山縣有朋などは、筆者は是を大忠臣なりと思ひ込んでゐたが、長田幹彦氏の「天皇」を見て、あの男位、大正天皇を憐れした人間はゐないのに驚いてしまつた。尤も明治の伊藤博文なども、同じ様なもので、新宿の菊見の御宴で、時の皇后陛下（照憲皇太后である）にはむれて抱きつく様な眞似をしたものだ。それを耳にした、やはり時の大官が「伊藤では仕方がない」と云つたそうである、無論伊藤では手の下し様が無いとの意味なのだろうが、かく云つた奴も、云つた奴である。泉山大藏大臣が山下春代女史にかちりついたのはわけが違ふ。何しろ時の皇后（照憲皇太后）が、馬車で御通行の朝、馬が荒れて、皇后が皇居前のお堀に落ちた事があつて、それを助け上げた別とうが、皇后を前から抱き上げたと云ふので、賞と罪を共に戴いたと云つた時代の出来事なのだ。伊藤にしろ山縣にしろ、上の奴等に腹からの忠臣なんて者はゐなかつたものらしい。

以上、筆の走る儘に、話が思ひ掛けぬ方向にそれたが、世の三代目たる者、宜しく氣を引きしめて、祖父なり父なりの功蹟、苦勞を無にしない様に氣を付けるのが本當だと思ふ。又筆者は、世の二代目の諸氏にも申上げ度いのである。即ち貴所

等の行動如何が、諸氏の子息、即ち三代目の人々に大きな影響を與へ、貴下等の現在の家を一層興すのも、又潰してしまふのも現在の貴下等が、種を蒔きつゝあるのだと云ふ事を提唱申上る。二代目のやり方一ツで、その跡繼である三代目の諸君が、例へ秀れた人であつたにしても、それ丈苦勞が倍加するのである。

「實實と唐様で書く三代目」も、必ずしも三代目ばかりの罰でない事を説いて、此の筆を結ぶ事とする。

上記は前號の元服考と共に、参考書も無く、只筆者の記憶を辿つての執筆であり、もし誤つた箇所があれば指摘御教示願へば幸甚です。

（上記三十二頁中惟盛を宗盛の子とあるは重盛の子の誤植に就き訂正いたします。）

貸 席

小名濱町上町一九番地

ウ ラ ラ

大 木 信 隆

—【宴會、商談に是非御利用下さい】—

連載長編小説

吹雪を衝く（第三回）

東 義 將

七、靜子の乗つた汽車

春日の乗つた汽車に二汽車遅れて、函館を發つた汽車は、その翌朝の午前六時四十分發、根室行の列車だつた。さすがに此の汽車には炭鑛行の入夫の姿は見えず、唯大島等の一行の男女交へての三十人余りの者だつた。

女と云つても、靜子の他に中年の人妻が四五人居る丈で、子供と云つては、その人達の中の二三人が赤ん坊を抱いた丈で、他には芳夫が一人居る丈だつた。炭鑛行の団体と云ふものは、どの団体も、その行先の会社のマークを大きく染め抜いた社名入の標色旗を、その現場に着く迄は必ず翻がへして車中でさへそれを綱柵なぞにかざしてゐるものなのに、何故か、大島の此の団体は、汽車が函館を出ると同時に、クル／＼と旗を巻いて、大島達はまるで炭鑛行なぞには關係の

ない、普通の旅行者の様な顔をして座つてゐる。

併し大島等は、離れて座つた大村親子には特に嚴重に警戒の目を光らせてゐた。唯、男の連中はそれぞれに美しい靜子には關心を拂つたが、さすがに大島に氣兼ねて、近づく者はなかつたのだ。大島は左の目に大きな白い眼帯をして、茶色の毛布を敷いた席を一人で占めて、窓に當てた大型の空氣枕に腕をかけ、苦り切つて煙草の煙りを吐いてゐる。前に座つた二人が、しきりに彼の機嫌をとつてゐる。此の一行の中、大島の近くに席を取つてゐる七八人の、如何にも炭鑛にも順れてゐると云つた休付の、そして人相も、それ／＼に猛々しい者達は初めから大島と共に、東京に人買に出掛けたもので、みんな大島の乾分と云つた者達だつた。

實は彼等は、大島をはじめ決して「××炭鑛會社」の人間ではなかつたし又會社に少しの縁のある立場の者でもなかつた。

つたのだ。職業紹介國營の裏をくぐつて、勝手に好餌の下に人を集めて、是を炭鑛の鑛夫供給業者に高く賣り付け、不當の利益をむさぼつてゐる、是こそ石炭増産の國策を拒む實に炭鑛のダニ、炭鑛のギャングだつたのだ。

彼等の手にかゝつて、思い掛けない道程を経て、變則な炭鑛夫に身を墮し、長い年月を過激な勞働に従事して、遂には心身共に患ね、悲惨な境遇を招く者は、實に年々枚舉にいとまがなかつた。男ばかりか、もしそれに、一寸した女の連れでもあつたものならば、必ず魔手を延ばさずには置かないと云ふのが、彼等の常套手段だつた。

大島の不機嫌にも理由があつた。春日に受けた屈辱の無念さもあつたが、それよりも最大の原因は、昨夜函館の驛を出て、わざと汽車を遅らせて、是も一つには鑛夫等の借錢の増加を計る手段として、順染の旅館に一先づ落付き、一風呂浴びて子分を相手に一杯やり乍ら、やがてその一人に命じて靜子を迎へにやつたが、父親の清藏一人がやつて来て、意外にも貸金の金額に、それに利子迄付けて返金の話しを持ち出し此の儘東京に歸り度いと云ひ出した事だつた。はぢめから靜子一人が目當と云つた様な氣持ち丈に、彼もさすがにギクツとしたが、わざとその金の出所なども問はずに、唯「旅の最中に今更突然そんな話は困る。それに證文はもう會社に送つてしまつたのだから、話は現地に着いてから、會社相手にして貰い度い」と、その場は無理にこまかして、今朝はこうし

て共に汽車には乗せたのではあつたが、さすがに現金を持つてゐられる丈に、是から先の欺し様にも頭をこちらし、又その金が、テツキリ、昨日の青森の一件の男から出たものに異いなくと思ふと、余計腹が立つて来るのだつた。

「ふざけた野郎だ」と思ふ反面に、見づ知らずの者に、あんな締まつた金を、無證で與へる相手の心理が、大島の感情では割り切る事が出来なかつた。「一休、あの野郎は何者だろう？ 人夫募集にも見えねえが」そして、醜くも、もしかしたらと靜子と昨日の男との船の中での誰も知らぬ暗い場所での、人目を忍ぶ出来事などを、勝手に想像して、そして自分が、前の募集歸りの船の中で、北海道渡りの春賣婦と過した一、二等船客の喫煙室の、それは余り船客に使用される事もなく、いつも電燈を消されてある、その暗い場所の——如何に、そんな事に安全なそんな場所を思い出したりして、無性に腹立たしさを覺えたりしてゐた。

一人の乾分が彼の傍に來て囁いた。
「兄貴、やつぱりあの金は、アノ野郎から出たものに相違ありませんぜ。」

「そうだろう！ そうとより他に思えねえ、で、どうして判つたんだ？」

「へー、函館で上陸間際の、ゴタ／＼の最中に、野郎の乾分がやつて來て、娘に厚い手紙の様なものを渡したのを、虎の奴が見たんだそうですよ。」

「ふーん、手紙をか？」

「へい、そうなんで、それがね、宿屋へ着いてから娘が開けたら、中から紙幣（さつ）が飛出して來て、親娘でビツクリしてゐるのを、募集で來たアノ、伊賀と云ふメツカチが見たんだそうで、あの野郎が私（あつし）に話しましたよ。」

「ふーんそうか。——それぢやあ娘が、變な眞似をして稼いだわけでもねえんだな。」

大島のその言葉に、

「へー、何ですい？」

乾分はけいんそうに訊き返したが、すぐその意味に氣付いたらしく、卑しく笑つて、

「へ、ま、まさか、それでもねえんで御座んせう。」

「馬鹿野郎！ 何を云つてやがんで。」

大島は乾分ををどしつけたが、今度は獨り言の様に、

「併し、おせつ介な眞似をする野郎があつたもんだ。——あの野郎今度こそ會つたら、生かしちやあ置かねえ、北海道中何處だつて、俺に知れねえ所はありやあしねえ。——」

「全くで御座んすねえ。」

そうした乾分の追従（ついしやう）の言葉も耳には入らぬ氣にこれが癖の片目を閉じて、ちつと片目文を光らせて、しきりに、悪い物思ひに耽けるのだつた。

大島とは大分離れた隅の席に清藏等の親子四人が向ひ合つ

て掛けてゐる。

東北迄の汽車の旅とは異つた感じの北海道のその沿線の景色に、芳夫も、もの珍らしげに見入つてゐるが、フト前に物思ひ氣に、移り行く窓の外に目をやつてゐる姉の姿に目を向けると、子供心にも春日を思い浮べてか、

「ねえ、お姉ちゃん、昨日の小父さんは何處へ行つたんだらうね？」

靜子は優しく弟に目をやつたが、淋しい微笑みを浮べて、

「そうねえ、何處へ行つたんでせうねえ……」

彼女の瞳も、子供相手ではあつたが、春日の話となると、急に生き／＼と輝くのだつた。勿論、昨夜からあの金を巡つて親娘の間には、もう幾度となく、彼の評さは、話題に登つたのだつた。夫婦の驚きや、喜びは非常なもので、清藏も急に元氣づいて、東京へ歸つてからの更生を、堅く妻子の前に契ふのだつた。妻のお時もその度に、涙さへ浮べて、去りし彼に感謝して、共に夫を勵ました。親娘が一樣に思ふ事は、皆もう一度彼に會つて、その恩を謝し度いと願ふ事だつた。

靜子は靜子で、父母とは又異つた感情で、是が非でも、もう一度彼に會ひ度いと希つたし、いや、今ではもう、此の儘では到底、ちつとしてはゐられない様な感情に胸を苦しめられてゐた。もし彼に、もう是きり會ふ事が出来なかつたとしたならばと、はかない淋しい思いが胸を責めて、唯悲しさを覺えるばかりだつた。

芳夫が、つぶやく様に、

「あの小父さん、本當に良い人だねえ——僕とても好きだ！
ねえお姉ちゃん、あの小父さんとても強いねえ。あのつかな
い小父さん、一ツベンにやられちやつたね！」

芳夫の言葉に、静子も微笑んだが、さすがに、

「そーね、でも芳ちゃん、そんな事お話ししては駄目よ。東京
へ歸つてからなら、澤山、お話ししてもいいんだけど。」

「そーを。どうして？」——だけど、あの小父さんどつちへ行
つたの？僕達と同じ所？」

「そうねえ、——それがねえ芳ちゃん。お父さんにも、お姉
さんにも、少しも判らないのよ。」

語尾も淋しげの静子の言葉に、傍らから母親が引き取つて
「本當ですわねえ、何處の方（かた）ともお名前さへも知らな
いのに、こんなにお世話になつてしまつて、どうしてお禮し
たら、いいでせうねえ。」

父親も口を開いて、

「全くだなあ。あんな立派な人はありやあしないよ。名も所
も知らず、それも別れる間際に、人傳で、こんな大金を
届けて下さるなんて、仲々普通の人の眞似の出来る事ぢやな
い。」

母親が、

「本當ですわね、お父さん、何とかして、もう一度お目にか
れないものでせうかしら？」

「な——に、お会い出来ないなんて事はないよ。きつと、何處
かでお目にかゝれるに定つてゐるさ。——仲々、お若いのに
しつかりとした監督さんだつた。あんな元氣な若い人達を、
あれ丈にしつかりと、くゝりを付けたさるお人柄だし、あんな
立派な体格の人だもの、何處にだつて目に立つて、お目に
かゝれる時がきつと来るさ。」

「そうでせうねえ。それでなければ、此の儘では、妾達は世
間に對しても濟みはしませんよ。」

「本當だとも、神様にお願ひして、一日も早く、あの方（か
た）にお会い出来る様にする事だ。——併し、今の處では、
あの方がおつしやつてくれる様に、借りを返して、早く東京
へ歸る事だ。な——に、本當に働けり氣になれば、東京にゐたつ
て、何だつて出来ない事はありはしない。——私の友達の仲
でも、こんなに落ちぶれた今になつても、變り無く心配して
呉れるのは關口さん一人だが、關口さんになつて、私の方か
ら、恥じて無沙汰になつた人だもの、會へば又きつと、良い
相談に乗つてくれるのにきまつてゐる。もう一度關口さんに
相談して、私の年でも使つてくれる様な、會社でも工場でも
探す事にしよう。——一生懸命に、死んだ氣で働いて、そし
て早く静子に良い婿を取らせる事だ。」

静子は、父母の言葉を耳にし乍ら、うつとりと春日の面影
を胸にゑがいてゐたが、フト自分の婿との父の言葉に、娘心
にさすがにハツとはしたが、——でも、もしあの方（かた）

となぞと考へたりして、思はず我獨り煩を朱くした。——併
し父の云ふ様に、あの方にお目にかゝれる時があるかしら？
自分達は、會社にさへ着けば、すぐに東京に歸れる様になる
だらうし、あの方も三週間位で、又、内地にお歸りに成ると
のお話だつた。もし又、何處か遠くの方へでも行つてしまは
れたとしたら、——やはり妾は、名も所も知らない人として
再びお目にかゝる機會も無いのではなからうか。——でも、
あの方は妾におつしやつた。「おそらく、永く貴女を忘れない
事ですわ」と。——妾もけしてあの方を忘れない。そして
何時かはきつと、あの方にお目にかゝれる時が来るに相違い
ない。」

静子は、そう堅く心に信じて、我から心を引き立て様と努
めるのだつた。

それは過去にも、彼女の美貌に想いを寄せて、人を介して
彼女を妻にと望んで來た話も二ツや三ツは有つたが、更に耳
をかさない彼女だつた。又、彼女の家庭の店先にも、短い月
日に度々靴を注文しに來たり、又その間にも幾日目かには必
ず、靴墨を買ひに來た様な、如何にも生活にも余裕のありそ
うな若い會社員や「僕はどうも靴ペラを失くすちで」なぞと、
妙な云ひわけをし乍ら、殆ど毎日の様に、店に立寄つた
學生などもあつて、彼女の家の店員達から、「みんな、お嬢
さんを見に來るんだ」と笑はれてゐる様な連中も、四五人は
あつた。

彼女がデパートに勤める様になつてからも、彼女の賣場の

洋品部に、急に若い男性の客が増えたと評されたし現に店
員の中にさへ、賣場が異ふのに、彼女の賣場にばかりこびり
ついて、相手にならぬ彼女に、仕方なく、他の店員達と談話
の花を咲かせ過ぎて、遂には重役から嚴重な叱責を受けた若
い三人の店員さへあつた。併し彼女は、ついぞ一ツの悪い噂
さが立つてもなく、今迄、彼女の心をとらへた者は、一人も
なかつたと云へるのだ。

彼女は今、胸元から一通の白封筒を出して、中の一枚の便
箋を開いて見入つた。無論、春日からの昨夜のものだつた。
幾度か、くり返へされた此のしぐさに、父母も傍らから、只
いちらしげに見入る丈だつた。

「こんな事で恩を賣る様では心苦しくと、心ならずも名
も所も申上げず、此の儘お別れしてしまいたいと思います
僕の失禮も是で判つて戴けると存じます。」

な——に人生なんて今日の吹雪の様なものですよ。いくら荒
れ狂つたとて、必ず明るい天日を、そして暖かく晴れた春
の日を迎へるものですよ。

明るく希望をお持ちになる事です。——

明るい春、希望の春、今の妾にとつては、それは一ツに貴
方にお目にかゝる事丈なのよ。心にそつと、それは眩やいた
が、思へば當てない望みにやはり心を暗くして、遂、瞞をう
るませるのだつた。

芳夫が急にさげんだ。
「ヤア——海が見えて来た。あゝお母ちゃん、子供がスキーをやつてゐる。」

八、春日の宿舎

外からドカ／＼と岡村を先きにして、後組の七人が歸つて来た。

外の粉雪を拂い落して、「只今」と口々に春日に挨拶して上つて来た。

「あゝ御苦労さん、みんな寒かつろう！」

會社への報告書の記入の手を止めて、春日は一同にねぎらいの言葉をかけた。

「全く雪でうんざりするなア。」

でも皆元氣よく、座敷内にしきつたストーブの周りに集つた。先組の連中も席を開いて、一同を迎へる。岡村が春日に「兄貴、坑内の方はすつかり済ませて來ましたから、明日行つて、一寸見て置いて下さい。」

「そうか、御苦労だつたな。場所が眞暗で、危い所なので必配してゐたよ。」

「全くですね。併し坑内の廣いのは、一寸驚きましたよ」

岡村のその言葉に、山田も傍らから、

「全くだ。入口から現場迄、あんなに道のりがあるんだとは思はなかつた。小一里はあるだらうなア。」

惣一も口を入れて、

「坑内を電車で行くとは思はなかつた。」

岡村が、

「本當だ。道だつてしどいし、道中はコンベヤーでふさげてゐやがるし、アレでは、もし萬一の時に、人間の動きに困りはしねえかと、俺はアレ丈が氣になるなア。外國でも、あゝなのかなア。」

ストーブに手をかざして、一同の言葉を笑ひながら聞いてゐた春日が、

「俺は前に、井上定祐と云ふ人の書いた『英米炭鑛見學記』と云ふ本を読んだ事があつたが、アレは相當古い頃の、あつちの炭鑛の様子を書いたものだが、どうも施設と云ひ、政府の關心と云つたものと云ひ、大したものだつた様に覺えてゐる。何と云つても、向ふの炭鑛は進歩してゐる様だ。日本の炭鑛も、未だ／＼眞似なければならねえ處がうんとあるだらう。」

「そうでせうねえ。併し兄貴、炭鑛へ來ると、右を見ても左を見ても石炭ばかりだけど、それでゐて私は炭鑛へ來て見たら、石炭の有難味が余計判つた様な氣がしますよ。」

「それは確かに岡村の云ふ通りだ。併し何も石炭ばかりには限らねえ、物事はみんなそうさ。米を作る農家の人の苦勞。炭を作る炭鑛の人の苦勞。今も池田が、白い紙で鼻をチン／＼かんでゐたがその紙を作る人の苦勞と努力よ。アハ、

池田、何もお前が、頭を掻くにはあたらねえ。併し、凡てその元を見極めなければ、察しがつかねえんだから人間なんてだらしのねえものよ。」

惣一が、焼いた鰯をさき乍ら、

「ねえ兄貴、南洋の生活も、づい分飽き／＼しましたけど、此の北海道も餘り感心しませんね——」

春日が笑つてゐると、傍の一人が、

「全くだ。此の十日間が英連に永かつた様な氣がしますよ」

春日は出された鰯を含み乍ら、

「無理はねえなア。暑い南洋から一ヶ月も経たねえのに、一足飛びに今度は此の雪の北海道だ。一口に北海道と云つたつて、中には札幌や函館の様な素晴らしい都會もあるが、どうも此の邊はあんまりバツとしねえから、お前達の様な東京の連中には一寸向かねえだらう。——併し惣一南洋で甘いものが無くて、毎日白砂糖をチビリ／＼嘗めてゐた事を思へば、有りがてへだらう。」

「そうですね。併し妙なもんだなあ。アノ當時は、内地へ歸り度くて歸り度くて仕方がなかつた南洋も、今ぢや懐かしい様な氣がしますよ。」

「そうだなア。大して甘味(うま)くもねえ椰子の實の水ももう一度飲みてえと思ふなア。」

その池田の言葉に、山田が、

「住めば都と云ふやつよ。」

「いくら住めば都つたつて、どうも面白くもねえ土地だなアカフエーだつて喫茶店だつて、ろくなのはありやしねえ」

一人の言葉に、清次が思い出した様に、

「今日俺の傍で働いてゐた保安の鑛夫の奴、俺が此の町のカフェエを貶したら、口惜しがりやがつて、ユニオンに行つて見る。天女の様な女給が居るといやつた。大笑ひさせやがらあア。」

「アハ、天女は良かつたなあ。でも一寸したカフェエが二三軒はあつたつてなあ。」

勝が笑ひ乍ら口を入れた。

「そんな奴等に、靜子さんを連れて來て見せなら、ビックリしやがるだらうな」

一人の言葉に、

「全くだ、井ノ中の蛙と云ふ奴だ。」

「そんな例へかたがあるかい。」

一寸、一同の口に靜子の評さがのぼりかけたが、それについて春日が、ちつと、口を閉じて語らずにゐるので、話は自然他の事に移つてゐた。

此處は、會社から貸與された彼等の宿舎で、此の空地の國Y町と、炭鑛の中間の、一寸人家の途切れた場所に、雪の原の中に、ボンと一軒建てられた堀立小屋の様な粗末なバラックだつたが、さすがに炭鑛地丈に燃料には事かゝらず、それに貸與の夜具も、木綿の眞新らしい、綿もあつく温たゝか

いものだった。食事も晝食丈は、現場で食つたが、朝夕共にキチリ／＼と近くの飯場から配達されて、只冷めたものなぞを温ためて食へばいい様な極めて呑気な生活だった。

春日がタバコをくゆらし乍ら、
「まあ何だなア、早く此の仕事を切り上げて、北海道を發つんだなア。——歸ればぢきに正月だ。」

やがて一しきり、賑やかな夕食も済んだ。雑誌を見る者、小説を読む者。中には便箋にペンを走らせる者なぞ、皆、思／＼の憩いの一時（ひととき）だった。

山田や、英三、清水などの四五人が、春日の方へ挨拶して「一寸、町迄行つて来ます。」

入口の土間で長靴を履いてゐるその出かける連中へ岡村が聲をかけて、

「みんな、あんまり遅くならないうちに歸つて来いよなア」
「O・K」

と、口々に、表で出て行つたが、

「有りがてえ、雪がすつかり止んだ」

がヤ／＼と笑聲まぢりに出掛けて行つた。

九、カフェー「ユニオン」

静子はこうした店の勤めに順れなかつたが、併し過去に、人の語るのを耳にして、凡そは知つてゐたカフェーが、こうも野卑で、低級な所だとは思はなかつた。東京のこうした店

を知らぬ彼女も、「是もみんな場所柄のせいなのかしら？」と考へたりした。

それでも、此のY町でも、一番大きくて上品な店で、収入も多いからとの宿の主人夫婦に勧められて、此の町に着いてから三日目の一週間前から此の店に働く様になつたのだ。

實は、此の町に着いてみて、はちめて自分達が、××炭礦會社とは、全く無關係な募集だつた事に氣付いて、早速、大島に三百圓の返金を持ち出したが、彼はなんだかんだとこぢつた揚句、結局元金の他に、利子と汽車賃やら辨當代、宿料、それに募集費用なぞの名目の下に、請求された總額は五百圓にも達してゐた。

今更驚いたが、如何共仕様がなく、おまけに町の宿に着くと間もなく、芳夫が風邪を引いて寢込んだが、遂に肺炎迄引き起してしまつた。——それは割合、輕くは済んだが——そんな具合で、なんだかんだと費用を使つて、取りあへず大島へは三百圓を返金して、改めて又、二百圓の證書を作つて彼に渡し、それで一先づ大島とのつながり丈は切つたが、その變り静子は、こうした店に働かなければならなくなつたのだ。

處が大島は、毎夜の如く此の店に現はれて、又、生憎と此の店でも上客らしく、——いはゆる、恐（こわ）もてではあつたが——相當の金ばなれで、來れば「オーさん／＼」の呼名の下に、女給達にも金故に騒がれてゐた。

に、それとなく春日のグループに就いて訊いてみた。

鑛夫と云つても、若い連中の夜の外出などは、無論別に荒い格としてゐるわけでもなく先づ町の流行の尖端を行くと云つた具合の姿で都會では余りお目にかゝれない、妙なガラの背廣に、坊やがする様な莫迦に荒い柄のネクタイを、さも得意氣に下手に結んだのや、中には和服の着流しの商家の若旦那風と云つた様なものなぞが多く、唯、残念な事には全部が全部、炭塵のしみが目の縁にウス黒く残つてゐて、一目でみんな、炭鑛の兄達と判る事が、どうも玉に傷だつた。

一人の——もみ上げを不器用にそりあげて、二ヶ所程を切つて、少しばかり血を、にぢみ出した勇さましいのが静子に云つた。

「知らねえなあそんなの。何しろ山には一萬からの人間が、あつちこつちに散つてゐるんだし、そんな、よそから一寸位來たつて判りやあしねえよ。」

他の者より一層炭塵で目の縁を薄黒く染めて、いくら洗つても落ちないんです。と云つた様な滑稽な顔をしたのが、口を出して、

「第一此の土地と定つてゐねんぢやあ尙更だ。此の北海道には、何百炭鑛があるんだか判らねんだからな。——」

はぢめの、もみ上げの血が——是が四人の中でも一番、兄半株らしく——ニヤ／＼し乍ら、

「何かい、その背の高い男と云ふのが、おめえの色男なの

併し、大島は他の十人程の女給には目もくれず、いつも静子ばかり呼んでゐた。別に、あぐい要求なぞを持ち出すわけでもなかつたが、来る毎に、静子と呼んで傍に引き付けて離さなかつた。静子もそれが、恐ろしいやら不愉快さやらで出来る丈去ける様にはしてゐたが、勤めてゐる以上、是も仕方なかつた。

併し、割合収入は續いて、夜毎に四圓や、五圓のみ入りはあつたが、何分一家の宿料や、諸雜費などを差し引けば、一日に一圓か二圓の残り、大島への返金の二百圓の額迄に、締めるのには大分の日數が考へられた。

その頃には、春日から渡された大島へ返金した残りの金も殆んどを使い果して嫌でも、静子の収入を當てにするより他に方法も無く、全く力を落しきつた清藏も、口惜し涙と共に「こんな時にあの方が居て下すつたら——」と、春日を忍んで考へ込んだが、その清藏さへも、此の二三日、芳夫に變つて寢付いてゐる様な始末だつた。

いつも親子の間には、春日の評さは取り交はされたし、静子も今では、もう片時として、彼を忘れる事の出来ない女性になつてゐた。——こうして働いてゐる中にも、もしかしたら、此の店に、彼が、——いや、例へ彼でなくとも、彼の連れの自分を知る者が來てはくれないであらうかなどと、そんな事のみを頼みにしてゐるのだつた。

今も彼女は、自分が受け持つた、四人連れの若い鑛夫連中

かい？」

「すぐにこうだつた。炭塵が言葉をついで、

「だつておめえ、そう思ふぢやねえか、俺達に名を教へねえで訊くなんて變ぢやねえか。」

他の者が良い事を聞いてくれた、と云はねばかりに、ニヤ／＼してゐる。

「一ていその男は何て名よ？」

是には静子も答へ様になかつた。

はぢめの男が急に酔つた様な態度をして、

「それはねえ明美ちゃんか（是が静子の此の店での呼名だつた）探せと云へば探さねえ事もねえが、その變り俺に一つ、キツスを與へろよ。」

そうは云つてみたが、さすがにそれは、柄でないと思つて一寸テレで、

「それがいけなければ握手だ。」

いきなり彼女の手を取らうとする。

静子は笑ひに紛らして、それを拒んだが、何だか背すぢをムゾ／＼としたものが走る様な感じがした。

何時の間に入つて來たのか大島が、静子の傍らに突立つて

「ヤイ／＼、ふざけた眞似をするぞと承知しねえぞ！」

いきなり荒い聲を掛けられて、四人組は、怖えた様に、急に静かになつた。

「どうも明美が來てから、此の店に、くだらねえチンピラば

かり、ウヨ／＼増えやがつて仕様がねえ。」

大島は言葉を洩らし乍ら、一人の女給に案内されて中程のボックスに腰を下した。

彼女の働き出した此の一週間、確かに此の店に、若い客が増えて來て、彼女は忽ち來る客の人氣的となつてゐた。

此の店での明美との呼名も、店に來た日に、マダムから本名の静子では、淋しいし、こうした店には平凡だからと、何か別の名を付けられ様とした時に、静子がフト、春日からの手紙の中の胸に焼き付いて離れない「明るい」と云ふ文字を思い出して、突さに「明子では」と云つたのを、マダムが、

「美」と云ふ字を付けて、彼女を明美と名のらしたものだつた。——せめて、こんな事に彼を慕ふ彼女の氣持ちも知らないで、大島迄が、「明ちゃん。」だとか「明美。」だとか呼んだりしたが、彼女は何か、けがらばしい様な氣さへして、春日に申譯けない様な感傷にさへ打たれた。

他の女給やマダムに勧められて、薄化粧は施してゐたが、ナリは旅の時の儘の、菊と葉の模様の銘仙の上下だつた。併し、その清楚な姿が却つて一層人の目を引きつけて、いやが上にも彼女の人氣をあほろのたつた。

間もなく、大島の係りの女給が、静子の傍に來て云つた。「明美さん。オーさんのデール手傳つて呉れない——」

その言葉に、氣も進まぬ氣に立つて行く彼女を、炭麩の四人連れが見送つてゐたが、一人が不満氣につぶやいた。

せて貰はえめえかね？」

静子はうつ向いた儘、顔も上げる氣にもなれず、

「えゝ有り難う御座います。でも父も大變良くなりました、今朝邊りはもう、起きて居りましたから——」

すると、乾分の一人が口を出して、

「いゝぢやあねえか明美ちゃん。兄貴は何も明美ちゃんの面倒を見ようと云ふんぢやあるめえし、お父つあんや、おふくろさんを、すけて上げ様と云ひなさるんだから、氣持ち良く受けた方が、明美ちゃんの爲だよ。」

「——ハア、でも、こうして妾が働いてゐれば、別に困る事も御座いませんし、——それにお借りした残りの分も、暫くすればお返し出來ると思ひますから——」

大島が慌て、

「おめえ又それを云ふ。俺は度々云ふ通り、何もあんな金なんか問題にしちやあねえんだ。俺はあんな證文なんか、おめえの目の前で破つてやつてもいゝと思ふんだ。」

静子が黙して答へないのを、大島は横目にちつと見て、

「それとも何か明美——おめえ、未だあの連絡船で逢つた野郎に未練があるのか？——なア明美。おめえまさか船で、あの野郎と、妙な仲になつたんぢやあるめえなア？」

静子は顔を上げて、ちつと大島の目を激しい瞳に見つめた。併し忽ち瞳を潤ませて、急いでハンカチに目をおぼつて、悲しけにうつ向いた儘、再び顔を上げ様としなかつた。

「ケツ！明美だつて、嫌がつてゐるぢやねえか。」

やがて彼等も、静子に變つてテールに來た女給に、支拂ひを済ますと、みんな大して面白くもなかつた様な顔をして歸つて行つた。

大島は今夜は三人連れだつた。彼一人が和服で、黒つむぎの重ねに、總絞りの帯を太くしめて、毛皮付の二重廻しの袖をはねて、悠然とをさまつてゐた。

静子が椅子を寄せて掛け様とすると、乾分の一人が、無理に彼女をボックスの大島の隣りに座らせた。

既に何處かで飲んで來たらしく、三人共赤ひ顔をしてゐたが、大島の前に座つた一人が、静子と大島を見比べて、

「いようー御兩人」

古くさい文句で妙な聲を出した。

「馬鹿野郎よさねえか！」

大島は嘗なめる様には云つたが、満更ではないらしく、ニヤ／＼して、片手の掌で顔を一撫でした。彼は、盃片手に身をくねらせて、静子に向ひ、

「なあ明美、俺は何も君に貸した金を、どうこうと云つてやあしねえんだ。只あの時は、俺も遂、いこぢになつたからあんな證文の一つも受取つて來たが、なに、あんな金、俺は欲しくも何共ありはしねえよ。聞けば、お父つあんの變つてゐる様な話だが、俺も本當に氣の毒な事をしたと思つてゐるんだ。どうだろう？一つお父つあんの面倒を、俺に見さ

そうした彼女の様子に、彼等も興ざめたのか、それとも何か他に用事でもあつたのか、大島等は何時にも似合はせず今夜は早目に引き上げて行つた。

一〇、手紙の使ひ

大島が去ると間もなく、若い男が一人、ドワーを排して入つた。此の邊に余り見馴れない男だつた。係りの女給に「いらつしやいませ。」と言葉を掛けられたが、如何にもこんな場所に馴れぬげな様子に、脊廣服のズボンに片手を入れて「しづ子つて云ふ人、居ますか？」と、聞いてゐる。

「エ？ 静子さん？ さあアそう云ふ人は此のお店には居りませんけど。」

静子はフトその問答を耳にして、ハツとして立上つて來た

「百代さん、妾の事ですから——」

と、引取つて、その若者に向ひ、

「妾が静子で御座いますが、何か御用でせうか？」

若者は一寸もぢ／＼してゐたが、

「僕、連絡船で一寸お目に、かゝつた者ですが、兄貴に頼まれて是を持つて來ました。」

上着のポケットから白い封書を出して彼女に渡した。

静子はハツと（あの方からだ）と、忽ち全身に喜びを走らせて、思はず微笑むで、

正しく彼の手紙に相違なかつた。静子は嬉しくて嬉しくて涙が滲む思いだつた。

そして別に紙に包んで、十枚の拾圓紙幣が同封してあつた彼女は彼の厚意を喜ぶと同時に、すぐに手紙の中の「右手を怪我して」の文句に胸を痛めて、

「どうも御苦勞様でした。それであのう、お怪我はどうなので御座いますか？」

「エ？ えー大した事はないんですが——」

「そうですか。御手紙はよく判りましたが、明日、私お見舞に上つて、お禮やら、御相談を申上げ度いと思ひますけど、それで今どちらにいらつしやるんですの？」

「イエ、それがあのウ、一週間ばかりは誰にも會えないんだそうで——」

「まあ！、そんなにお悪いんですの——困りましたわね。」

静子は案じて、眉をひそめた。

「では、お手紙の通りには致しますからとお傳へ下すつて、あのウ、お宿文お教へ下さいませ。」

「へー——一週間目に兄貴の方から、上るからと云いましたから——」

静子は淋しげに、

「そうですか——」と、目を落して見返した手紙には、相變らず彼の氏名が書いてはなかつた。

静子は思い切つて、

「まあ……済みませんでした。一寸こちらへお掛けになつて下さい。」

入口近くの隅のボックスに彼を誘つて、自分もその前に掛けた。

船で此の男には氣付かなかつたが、やはりあの方からのお使ひに違ひないと考へて、急いで手紙の封を切つた。——

それは彼の前の手紙の手筋とは違つたもので、静子もフト不審には思つたが、その儘讀み下した。

突然お手紙を差上げて失敬します。

貴女が此の町に來て、そうしたお店に働いてゐる事を知つて心配申上げてゐます。

お父さんや弟さんが病氣の事も知つてゐましたが、一寸事情があつて、お見舞に上げません。併し、こんな土地にお父さんや小さい子供を永く置いては、健康に一層良くないと思ひます。お父さんとお母さんを、一先づ先きに東京にお歸しなさい。お金を百圓入れてあるから、是ですぐにそなたすつて上げて下さい。

貴女が残りつてゐても、心配なくとも僕達がゐますから必ずお力になります。後（あと）半月程で僕達も歸りますから、その時御一緒に東京に歸りませう。

僕は今、一寸右手を怪我して手紙を書けないので、此の手紙は弟分に書かせました。

いづれ近い中にお目にかゝります。

「ねえ、あの方は、お名前何とおつしやるの？」

恥かしげに、相手の男に聞いてみた。

「へえ、それもあのー兄貴が來てお話しする迄なんにも云ふなと云ひましたので——」

「まあ？ そうですか。」

彼女は、彼のカタクなやり方に一寸淋しい氣持ちにはなつたが、やはり如何にも、それも彼らしくかつたし、後一週間の辛棒で再び懐しい彼に會へると思へば、むしろ彼の口から直接に名も聞かせて貰いたかつたし、今は實に久々に晴々とした氣持ちになれた。

「どうも御苦勞様でした。ではお歸りになつたら、宜しくおつしやつて、くれ／＼も大切になさる様にお傳へ下さい。」

「へー、——ちやあ左様なら。」

外に出様とする彼にフト氣付いて、今、大島の番の女から「大島さんから」だと渡されたばかりなのをその儘帯の間に挟んで持つてゐた幾枚かの五十錢札をその儘取つて、

「あの失禮ですけれど、お煙草でも。」

云ひ憎そに、併し彼女としては大出來の舉に出でた。

「どうもすみません。」

金を受取り乍ら、ビヨコンと一つ頭を下げる彼に、

「ねえ、きつと一週間目にはおいで下さいとお傳へ下さいませ。そしてお大切にね。」

「へえ、承知しました。」

なんだか上の空の様にその男は急いで表へ出て行つた。

その男が、「ユニオン」の店から半丁程の町角迄来た時、「オイ」と云つて現はれたのは、大島とさつききの二人の乾分だつた。

若者の近付くのを待つて、大島が、

「どうだつた？ 巧くいつたか？」

「へエ、巧くゆきました。」

「そうだろう。手めえなら此の土地に未だ新しいし、大丈夫だと思つたんだ。で、手紙を読んで何とか云つたか？」

「へエ、明日見舞に行きたいが、今何處にあると云ひました」

「なに？ 明日、見舞に行くつて、ふざけやがつて、大そうな惚れ様をしゃがつたものだ。で、手めえ何と云つた？」

「へエ、俺は判らねえから兄貴がいけねえと、云つたと云ひました。」

「兄貴がいけねえ？——妙な言葉だな。俺の事か？」

「イエ、俺は只、そういつた丈で——一週間すると兄貴が来るからと云つてをきました。」

「そーか、親父を返すとか何とか云はなかつたか？」

「へー何ですか、手紙の通りにすると云つてました。」

「フーン、巧く行くな。どうも百兩も出して、あんな野郎をいゝ顔にしたんぢやア、分に合はねえが、是もあの女を手に入れる爲ぢやあ仕方がね。——」

大島は舌打ちと共に苦々しく〇いた。

「それからね、男の名を聞かれたのには、驚きましたよ。」

「何、名を聞かれた？ で、手めえ何と云つたんだ？」

「それも何と云つていゝか判らねえから、やつぱり「兄貴が云つちやいけねえと云つたと云つて置きました。」

「馬鹿野郎だな、何とか他に云い様もあるうちやねえか。變んな云ひ方をしやがつたな。まさか疑ぐられたわけでもあるめえなア。」

「あつしも。まさか兄貴は大島と云ひますとも云へねえんで仕方がなかつたんです。」

「馬鹿野郎、當りめえぢやねえか、張り倒されんな。——まあいゝや、邪魔な親父や、婆あさへ歸しちゃへば、後はもうこつちのものだ。」

大島はニヤリとした笑ひをもらしたが、重ねて訊いた。

「で、それつきりか？」

「歸りに三圓呉れました。」

「なに？ 三圓もらつた。それは俺が今やつたばかりの金だ。それぢやあ手めえの駄賃はそれで棒消しだ。」

若者は不満氣に頭を掻いた。

「その變り、飲ましてやるから付いて来い。さあ、みんな、たつ川へ行つて一杯やろう。」

大島を先きに左右に乾分が従つて、四ッ角を曲つて、明るい灯の方へと歩いて行つた。

「ユニオン」と反對の方向から四五人連れの連中がやつてきた。

「どうも氷の上を歩く様で、すべつていけねえ。土地の連中は歩くの巧めえと思つたら下駄にも長靴にも、裏へ、すべり止めの釘が打つてあるんだとよ。」

そう云つたのは先程宿舎を出て来た連中の中の英三だつた「そうだつてよ。馬の足の底にも釘が出てゐるんだつてな」

答へたのは杉井だつた。

「それにしても、どうだい！ 子供達のすべるの巧い事、えーをい。」

山田がそう云つた。

やがて彼等は「ユニオン」の前迄やつて来た。そのカフエーの明るい灯に、ふと一同が足を止めて、

「此處が、一番大きなカフエーだろう。一寸してるぢやねえか。」

清水が云へば、

「あゝ此處だ。今日鑛夫の奴が天女様の様な女給が居ると云つたのは。」

清水が答へる。

「一ッは入つてみようぢやねえか。」

英三が先に、清水も杉井もそれに續いた。

入口の二重ドワーのガラス越しに中を覗いて、英三が、

「なんだい、人がウヨ／＼してやがるぜ。」

社 告

企劃部 加藤 順 一

右ハ自己ノ本誌關係ノ名刺ニ「新生いわき新報社記者」トベン書キ致シ、右新聞ノ運動モ致シ居ル由、會員ヨリノ御注意ニ依リ知リマシタ。併シ當「港の灯社」ト「新生いわき新報社」トハ何等ノ關係無キモノニ就キ、此ノ段謹告申上マス。

同人雜誌 港の灯社

小名濱町役場殿 五〇〇圓
小名濱町警察署殿 五〇〇圓
江名漁業會長黑川喜一郎殿 四〇〇圓
江名町役場殿 三〇〇圓
綴燃料鑛業株式會社殿

昭和二十四年二月二十日現在
(略敬稱)

泉村長 吉田勝記
江名町長 近藤貴一
二本松町竹田 田中吉太郎

(御入會順敬稱略)

全	配電課長	新安長次郎
全	全	齋藤花枝
日	素庶務課	高橋タツ工

全	工務次長 井上友一郎
全	動力課長 菅野茂夫
全	工作課長 內田繁秋
全	合成課長 香取良一
全	配電課 坂本洋平
全	動力課 東海林孝夫
全	合成課 石井孝治
全	倉庫 木村太郎
全	車庫 深田政久
港灣會社課長 橋本富久商店	砂押興一 若松忠久
沖見町片寄武士	
古港青山漁業佐川キミエ	
常磐土建大平貞	
長枕坂本肝油工場	
第一磐城貨物井上新四郎	
町會議員高木嘉一郎	
榮澤醫院賀澤貞雄	
船引揚須永恭平	
橫町小野榮	
岡小名柳内利行	
全大友孝之進	
全山泉甲	
長山電氣長山廣之進	

大	小港、船具店	原初瀨長松	第一發電所	馬目三枝	草野醫院	草野道平	本町。鐵工所	田中勝榮	上町柏屋商店	加藤勝郎	積町	遠藤青果店	經川。古着商	高尾松五郎	中明神町	なるゝ旅館	橋本。菓子店	黒田	橋義武	常磐交通	大橋善吉	本町	原田千鶴子	水試。無鱗魚	藤田喜一	漁夫勞組	早川知之	古	淡野崎武一	東北海道支局	水野俊男	經川	坂本俊二	古	淡伊藤増太郎	定	西長瀬太洋	全	吉田正	西町郵便局	片寄房次	定	西大竹高	岡小	名村上功	中坪。杵や鈴木文吉	第二合同笠間勝美
---	--------	-------	-------	------	------	------	--------	------	--------	------	----	-------	--------	-------	------	-------	--------	----	-----	------	------	----	-------	--------	------	------	------	---	-------	--------	------	----	------	---	--------	---	-------	---	-----	-------	------	---	------	----	------	-----------	----------

下	全	松	渚	定西	横	愛宕	岡小	榮	定東	須賀	古	上	橫	上	榮	松田	テール	全	下	船引
町長瀬國三郎	富田彌吉代書事務所 高木興四郎	馬上一幸男	中前澤由五郎	廻横山六郎	町安島光照	下塩田七郎	町門馬大	町江尻せい子	町鈴木行雄	町大橋はま子	小林船具店	町鈴木光弘	町鈴木光弘	町三陽	町志賀みさ子	松田醫院 松田武一	番館小野忠治	青果店坪内榮一	神明町木村勝	湯澤田貢

野	町	竹	古	本	竹	大	上町	臨港	常陽	竹	木田	上	長	七十七	港灣	松	本	中坪	定	須	上	清水	元
田	役	明神	上	町	町	原箱	國華堂	鐵道	銀行	町	齒科醫院	江尻	町	七十七	會社	中	町	三瓶	西	賀	町	工業所	虎山
丹野作平	小泉安雄	櫻井正治	野崎昇太郎	中野武雄	製鹽協同組合	箱崎精史	瀧爲春	藤原孝次郎	柴木正男	小林仁平	木田啓松	江尻ハ子	町	枕長上庄司	櫻井支店長	加藤照雄	中村照行	鈴木完治	三瓶政人	鈴木兼吉	赤塚美輝	上坂太刀彌	千葉卯一郎

元	住	船	全	下	小	字	辰	船	後	上	竹	中	元	定	元	大	第	住	滑	本	愛
別	本	引	可	町	港	島	己	引	宿	町	町	坪	別	西	別	原	三	吉	津	町	岩
馬	誌	場	喫	齊	榮	遠	町	場	分	中	馬	古	馬	吉	上	鈴	小	江	井	小	上
上	協	弟	茶	藤	左	藤	三	國	平	野	善	茂	節	田	遠	木	學	川	上	野	佐
	員	子	鈴	兵	衛	定	洋	嘉	孝	利	親	田	一	基	俊	文	校	澄	益	昇	藤
	會	丸	橋	衛	門	雄	鐵	一	一	工	觀	信	子		夫	雄	長	子		界	次
	員	狂	池	街	小	雄	工									仁	局				
	別	行	洗	新	野	雄										水	長				
	馬	雄	池	街	野	雄										竹	長				
	上	立	立	立	利	雄										店	長				

泉 村	泉 驛	青 年	瀧 尻	全 自	全 驛	大 字	江 名	江 浦	中 ノ	全 郵	北 町	漁 業	折 戸	永 崎	中 ノ	た か	永 崎	猪 狩	江 名	町 役	全	全
長	長	會	尻	轡	前	族	町	江	作	便	町	無	吉	崎	ノ	ら	崎	狩	中	役	收	田
大	大	長	水	馬	子	館	ノ	名	泉	局	吉	線	田	土	作	食	土	齒	學	場	入	中
越	越	水	野	目	商	松	部	造	沼	沼	田	局	武	谷	遠	堂	勝	一	校	設	吉	田
幸	幸	五	井	新	高	家		船	田	田	勝	小	弘	忠	藤	黑	馬	耶	鈴	英	政	田
平	平	郎	慶	美	木	清		所	春	春	彦	磯	久	夫	馬	川	雄	一	木	里	志	田
			治		之	峯			吉	吉						龜		城	里	志	田	

折戸安龍甚平
中ノ作布施忍
全川岸吉田重三
全吉田清
天ケ作加藤正志
中ノ作根本ヒア
永崎澤入政一
江名南町鈴木淺雄
全豐町字八幡鈴木健三
湯本町三箇宮本利治
新潟縣西蒲原郡柏浦幸一
内郷町ノ部
内町水ノ出中條正敏
綴七反田松本清
全一ノ坪山守榮一耶
全西川カッ子
全續橋逸郎
全段塚隆盛
全草野莊二
内町水の出佐々木行雄
内町小學校大越卓
全金坂四家明光
内町麻生退三

◎綿切後の分は、次號に發表。

五五

映畫「黒雲街道」を観る

黎 明

磐城座の松本氏に用が有つてお訪ねした朝、「黒雲街道」を見て貰つた。映畫の變り目を見せ、暇の無い自分は日本物も況して余り好きな時代物を此の處少し見る機会が無かつた。黒雲街道を何か俠客物位に考へてゐたら計らざりき「佐倉五郎」で有つた。キャストを見なかつたので、どんな俳優陣なのか知らなかつたが、映畫の進むにつれて見てゆくと仲々大物揃いなのは嬉しかつた。先づ千恵子の助、美しき市川春代、映畫界の元老横山運平も、いつもの老齡故の端役より、づいと動いてゐる。右太衛門の妹役をやつた女優は美しかつたが自分は名を知らない。吾々が昔、松之助時代から二回や三回は見た佐倉五郎と異つて、やはり今日の時代丈に成程扱い方が大分異つてゐる。第一昔の佐倉五郎は一種の怪談映畫で、最後の宗五郎を初め妻子の處刑の後を、必ず宗吾一族や、伯父に當る印幡沼へ飛込んで死んだ坊さんの「お化け」を出したもので有つた。處が今度のは花柳小菊の旅藝人なぞを

出して輕い戀愛迄織り込み、筋の零圍氣を柔らかにし、確かに見安くもしてゐる。併し本筋には外れるが、花柳小菊が舞台に出るシーンでも入れたら、興業千恵子の宗五郎は初めの方の巧くない。彼の役が名主で有るの、で、武家の隠微。丁度、山科閑居の大石内蔵助を思はせるものがある。妻子共にそう有つた。將軍へ直訴の寛永寺の場面は、もつと豪華なセットで有り度い。昔の人は、映畫を見て無條件にすぐ泣いたものだ、黒雲街道は確かに泣かせるものを持つてゐる。若い頃千葉縣の宗吾神社へは二回を參詣し、その頃から宗吾好を讀んだ自分は、木内宗吾郎に就いては、その地方で傳説なぞを讀んだ事がある。宗吾郎は木内宗五郎の孫の血統で有るが、先には何處かの知事から官職に迄進んだ。一般に甚兵衛や、今度の映畫には出ないが伯父の坊さんなぞは實に在りなると傳へられてゐる。甚兵衛なぞは腹からの宗吾崇拝者で、この映畫に出る様な過激な人物ではなかつたらしい。丁度甚兵衛(月形)を若くしたのが萬兵衛(右太衛門)で有る様だ。併

し甚兵衛をあんまりに扱つたのも亦面白い。あの映畫を見てゐて、佐倉五郎の惡税苛求と、税金重課と、否、税金惡化時代の今日一方は領土の榮華と、惡家老、惡代官の私慾に因を發して來た様だし、今日は敗戦に依つて來つたもので仕方が無いのかと考へたが、よく考へると、先の日中央ばかりか縣内に起つた諸種の事件、就中昭和電工事件なぞは、充分に佐倉五郎の腹藏堀田公の贅澤三昧にも當つてゐる。否國民の税金を氣儘勝手にされ過ぎてゐた事は、正に當時以上と外に直訴の出來る相手を持つてゐた事は宗五郎にとつても、亦佐倉五郎の人々にとつても有つた。併し現在の日本人は、爲政者の惡政に對して一体是誰に向つて訴へたらいふのか？國家の行政整理の首切りでも初まつたら、國民の黒雲街道は永久に續くのである。しみじみと考へた事は、只代議士諸公、縣議諸公に充分に活眼を開いて、眞に國民の爲の政治を行つて戴き度いと希ふより他に道が無いと云ふ事である。(終り)今月號は長文五種掲載の爲、短文及び短歌其の他を掲載出來なかつた事を、會員並ぶに投稿者諸氏にお詫び申上げます。

小名濱町橋町

小 野 榮氏

本誌同人として御紹介申上げます

同人雜誌「港の灯」

主 幹	東 義
同 人	新 妻 一
同 人	根 本 兵
同 人	近 藤 正
同 人	柏 浦 角
同 人	小 野 卓
同 人	小 山 野
同 人	小 沼 山
同 人	加 藤 久
企 劃 部	一 幸 克 豊 榮 郎 治 雄 雄 渡 將

毎月一回 二十五日發行
投稿切 毎月十日
原稿文筆ニ關スルモノ凡テ自由
入會金 四十圓
會 費 六十圓

福島縣小名濱町船引場四三
編輯人 東 義 將
發行所 福島縣小名濱町船引場四三
印刷所 平 活 版 所
福島縣小名濱町船引場四三
發行所 同人雜誌「港の灯」社

寫眞!!の御用は

助川寫眞スタヂオ

小名濱町本通り

電話(小名濱)三〇八番

御婚禮御見合記念撮影

受験用其ノ他、夜間撮影

出張撮影には遠近を問はず御伺ひ致します

運輸省指定旅館

小 瀧

渡邊キヨ子

電話(小名濱)一〇三番



御宴會には是非郷土の歡樂郷鎮泉旅館「小瀧」を御利用下さい

御宴會團體御宿泊等御豫算で格安にお引受け致します
湯本街道バス「小瀧」前下車
小名濱町中心ヨリ徒歩二〇分

尾城寫眞館

尾城せい子

小名濱町本通り

電話(小名濱)一〇四番

婚禮見合其ノ他記念撮影は

親切丁寧の當店を御利用下さい

〔出張撮影は遠近に關はらず承ります〕

みなさまの憩の店

純喫茶 四ツ葉
お茶とお菓子

小野寺ヒメ子

小名濱町上町二三番地

ゴム靴ミタイや修繕は

優秀なる新田の技術で
初めて御満足を得られます

ゴム製品修理専門

新田ゴム更生所

小名濱町定西二八二番地

三徳文庫

昭和二十四年二月二十五日印刷
昭和二十四年三月一日發行

同人雜誌「港の灯」

第一卷 第三號